
真・恋姫†無双 ～転生×羊×念?～

学生ニート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双　　↳ 転生×羊×念？　　↳

【Nコード】

N62700

【作者名】

学生ニート

【あらすじ】

念を使ってみたいオリジナル主人公が念能力をもらって恋姫の世界に転生する。
そんな主人公なるべく目立たないようにガンバる話……になるべくしたい。

恋姫の世界で念を使ったら？と思ったので書きました。
始めて書きますが、思いつきで書いているので投稿は不定期ですし、話がおかしいところが在るかも知れません。

最強モノやオリ主、オリキャラが嫌いな人はご不快に思われるかもしれない。

ぷろろーぐ（前書き）

始めて書きました。

思いつきで書いているため、会話やキャラがおかしいかも知れませんがご容赦ください。

ぷろろーぐ

転生。

それは、画面に入れない現代人に残された最後の希望。

物語の世界での暮らしは、今よりも充実したものになるに違いない。

と思っていた…そんな時期が、僕にもありました。

「――うぬ？（ここ何処？）」

実際にこうして赤ん坊になり体験する前までは…

〈少し前の話〉

どうも、年齢Ⅱ彼女いない歴の中村 信です。

魔法使いになるまで後10年を切った今日この頃、顔は中の中だと信じているので彼女が出来ないのは顔では無いと思いたい。

そんな事を思いながら歩いていると、目の前から歩道に乗り上げながら猛スピードで突っ走ってくる車が目に飛び込んできた。

意識が消える前に祈ったことは、家に残して来たパソコンの中身の消滅だった。

キキーンッ ドンン！！

暗い闇の中から意識が覚醒したら、白に覆われた空間に立っていた。
(はて、たしか大学へ向かっていたはずだけど…いったい何がどうなってこんな場所に?)

そして、目の前には黒いスーツ姿で平均的な日本人の顔をした男。
こちらが突然の状況に戸惑っていると、彼は突然問いかけてきた。

「おはようございます。早速ですが説明をさせていただいても宜しいですか？」

「うえ？ ああ、はい」

先ほど覚醒したばかりの脳で曖昧に返事を返す。

おそらく…いや絶対声が裏返ったな。

「では、早速——」

そう言うのと、スーツ姿の男は説明をしてくれた。

話を聞いているうちに、脳も完全に覚醒し出したようだ。

どうやらオレは投稿小説のテンプレ通りに管理者と呼ばれる彼らのミスで事故死してしまい、これまたテンプレ道理に転生させてくれるらしい。

そんで、死なせてしまった代わりに能力とか付けてくれるらしい。しかし、タダではなく対価と引き替えらしい…。

「——と、以上で説明は終わりです。質問とかありますか？」

む、どうやら考えてる間に説明が終わったみたいだ。

そうだなあ………っとそう言えば。

「転生ってことは、世界とか決められるんですか？」

「いえ、誠に勝手ながらこちらで決めさせていただきます」

「そう…ですか…」

むう、世界はランダムかあ。出来れば平和でのんびり出来るところがいいなあ。

ゲームでは戦記ものとかが好きだけど、実際に行くのはちょっとキツイ。

だって怖いし、それでも無双とか憧れるけどね!!。

「どうやら、質問はもう無いようなので能力の付与に移させていた

できます。

ご希望の能力を仰ってください」

そう言うのと、どこからか端末のような物を取り出した。

どうやらあれにこれから決めた事を入力して行くようだが…本当にどこから取り出したんだろ？。

いや、そんなことより能力か……、取り合えず《念》かな。

対価がなるべく少なくても済むように《念》を覚える才能と使う才能をもらおう。

それと危険な世界だったときの保険で武術を覚えたいから師匠がほしいな、どうせなら強くなりたいし。

あと一応知識の保護とかも入れといった方がいいかな。

《念》の内容は今覚えているが、時間がたったら忘れそうだし。

「えっと、漫画のHUNTER×HUNTERに出てくる《念》という能力を覚える才能と使う才能。

あとは知識の保護と向こうの世界で武術の師匠がほしいです」

「《念》ですか、失礼ですが貴方の記憶から調べさせていただきますので

少々お待ちください」

そう言うのと、スーツ男は僕の頭に手をかざした。

記憶を調べるって言われたから、もっとスゴい事をするのかと思ったけど。

手をかざすだけで記憶視れるとか、なんて便利なんだ！。

と、くだらない事を考えているうちに脳スキャンが終わったようだ。

「なるほど、《念》については大体わかりました。

記憶にない細かい設定などはこちらでしておきます、宜しいですか？」

「はい、お願いします」

「了解しました。残りの要望も大丈夫なので、次は対価の方をどうぞ」

対価かぁ、「前世での存在」とかでも大丈夫かな。

「前世での存在」って言っても一般人の存在じゃ価値は低いか。と、伝えたところ。存在と言うものは結構な価値らしく、対価としては十分らしい。

むしろ「《念》を使う才能」にしたので多少余るらしい。

なので「適当にその世界で使えるような才能でも付けておいてください」と言っておいた。

「はい、お疲れ様でした。それでは注意事項です。

- 1, 能力の付与などは転生の間に行われます。
 - 2, 能力付与にともない、同時に対価もいただきます。
 - 3, 転生後は此方と連絡が取れませんのでご注意を。
- 最後に何か質問はありますか？」

「いえ、とくには」

「それでは、転生に移ります。良い来世を——」

そう彼が微笑んだ瞬間足下に穴が開き。

「ええ？」

僕は暗闇の底へ落とされた。

「ひゃあうえあああテエンプレエあああうあああああ——」

落ちている時、目と下半身から涙が漏れそうになった。

くそして今く

目が覚めると、知らない綺麗な女性と優しそうな顔をした男性の二人が
笑顔で此方を覗き込んでいた。

「あなた、信（しん）が起きたみたいですよ？」

「おお、本当だ！しん、僕がおまえの父だぞ。」

おまえの名は姓は羊、名は枯、字は叔子、真名は信（しん）だ。
眼を開ける前もそうだが、眼を開けた今の顔もかわいいなw
将来はきつと縁（えん）に似て美人の娘（むすめ）になるぞ！」

「…………あなた、信は男の子よ？」

「（´・ω・｀）ぬう？」

女性に言われた男性は、キョトンとした顔で女性に返事？をしていた。
た。

しかし今は二人の会話より…………

「——うぬ？（ここ何処？）」

同じくキョトンとしていた。

ぷろろーぐ（後書き）

誤字や脱字などがありましたら、ご報告お願いします。

第1話

SIDE 父（優）

僕は羊ドウ。昔は傭兵なんてモノをやっていたが、今では司州の洛陽に小さな店を持つ料理人である。

しかし、商いがうまくいかずに途方に暮れていたとき、知り合いの行商人からおもしろい話を聞いた。

珍しい料理を出す店が建業にあるという話を聞いたので一旦店を閉め、僕は建業に向かった。

やっこの思いで建業にたどり着くと、早速件の店を探すため道を歩く街の人に尋ねた。

街では評判の店だったので思っていたよりも早く見ける事が出来た。街の人の話によると、その店は家族でやっていたそうだが、今では娘さんが一人で切り盛りしているらしい。

店の前まで来ると客は見えずどうやら準備中のようで、今なら大丈夫だろうと思ひ弟子にしてみらうために店に入ると、中には美しい女性が一人開店の準備をしていた。

僕は彼女に見惚れてい、彼女は此方を見て小さく笑っていた。

今でも彼女は「そういえばあの時、あなたの顔ははとも面白い顔をしていた」と時々思い出したように僕をからかってくる。

それから、彼女の弟子にしてもらい気付いたら夫にしてもらった。た。

夫婦になってからは街の男から殺気と呪いの言葉を、女性からは祝福と祝いの言葉をもらった。

今でも夢だったのではないかと思うぐらい、僕の何処を好きになっ

てくれたのだろうと不思議に思っている。
理由を尋ねても、彼女は秘密だといって僕になかなか教えてくれない。

っと、思い出に浸っていると彼女の声が聞こえた。

どうやら、つい先ほど生まれたばかりの赤ん坊が目を開けたらしい。
我が子に顔を見せるため、妻の縁（えん）がいる部屋へ急いで向かう。

部屋に入ると彼女の腕に抱かれている我が子は、確かにそのかわいらしい瞳を開いていた。

目を開けたその顔は寝ていた時より、今も此方に微笑みかけている彼女に似てる。

そのかわいらしい顔つき見て僕が「美人の娘（むすめ）になるぞ」といったら男の子だといわれ、思わず彼女の顔を見ながら変な声を出してしまった……不覚。

そんな僕の顔を見て、彼女は僕と初めて会ったときのように笑っていた。

そして、そんな彼女の笑顔を見て僕も、つられて一緒に笑ってしまった。

S I D E O U T

～回想？～

どうも、みなさん”元”中村 信です。

今の名前は、姓は羊、名は枯、字は叔子です。

あれから夫婦二人がイチャつきだしたので、いろいろ大変でした。とりあえず、自力で歩けるようになるまで、両親の会話からここがどんな世界なのかを考えながら過ごすことにしました。

でも、最初のうちは会話を聞いている間に眠くなってしまったので、あまり情報が入って

来ませんでした。—（ほぼ1日中寝てましたよっ）

おそらく赤ん坊の体だったらでは無いかと僕は思っています。

体が自由に動いて移動出来るようになると、眠気もなくなり多くの会話を聞けるようになります。

なりました。

どうやら、ここは昔の中国らしく、今は現代という《後漢》と呼ばれる時代でここは楊州の建業という街らしく比較的大きな街なんだそうです。

中国で後漢で羊枯のキーワードで思い出したのが前世でやってたS EGAのカードゲーム、三国志大戦。

そのゲームで魏と呼ばれる勢力の部将カードで羊枯という部将がいた。—（死ぬ前日に当てたので良く覚えてる）

だけど、羊枯は三国志の最後の方に出てきた部将だともうんだけど、まだこの世界では黄巾の乱すら起こっていないらしい。

そして少し経ってから気づいたんですが……言葉が日本語だったんですよ。

不思議に思ってた家にあった本を見てみたら中身は漢文でした。

以上の事からここは《パレルワールド》だと言う結論になり、三国志の羊枯としてでは無く自由に生きようと思います。

《パレルワールド》といえば、この世界には真名というものがある、真名とは知っていたとしても、認められない限り使ってはならない神聖なものらしい。

確か、前世プレイした真・恋姫十無双というゲームにそんなものが在ったような……。

まっ、まあとりあえず保留にして置こう。

もしも、恋姫の世界だったらこの世界には嬉々として仕合をする人が何人もいるので、なるべく目立たないようにしよう。

これから戦乱の世になり、強いのがバレたら徴兵されて戦にかり出され、人を飛ばすような人外と戦いでもしたら良くて大怪我、最悪ミンチになっちゃう！。

そんな事にならないように、折角才能を頂いたので早速《念》の修行と文字の勉強を始める事に。

《念》の修行はとりあえず精孔を開くため《燃》を時間が空いた時にするようにして、文字の方は、父上（赤ん坊の頃に苦勞を掛けたのを見て感謝しているののでそう呼んでいる）の持っている書物を両親に読んでもらい文字の勉強をしています。

五才になる頃には《念》を使う才能をもらったおかげで無事に精孔を開き、コンタイギョウ四大行の修行を始めることができるようになりました。とりあえず、最初は常に《纏》をしていられるように修行し、続い

て《絶》、《練》と才能をもらったおかげで躓くことなく修行ができたので、そろそろ応用技の修行も少しずつ始めようかと思っています。それから、水見式で自分の系統を調べようかと思っています。

人気の無いところでこっそりとやった水見式の結果、水が器からあふれ出てきたのでどうやら僕は強化系のようです。

強化系は攻め、守り、癒しなどを一番効率よく発揮できるタイプなので、後漢の中国という危険な時代に転生してしまった僕としてはとても嬉しい系統でした。

そして、《念》の修行だけしていてもこの世界では何が起こるか分からないので、これから戦闘の修行も始めることにしましょう。

（回想終了）

（さて、戦闘の修行と言っても何をすればいいのかな。

とりあえず、誰にも見られないように注意しながら木の棒を剣に見立てて振ってますか！）

そう思い、早速始めようと棒を振りあげた瞬間。

「あれ、信？何やってるんだい？」

さっそく、父上さまに見つかりましたね。

第2話（前書き）

第2話です。

とりあえず、3話も書いたけど……

今日はもう疲れたから3話は明日UPします。

第2話

父上に早速見つかり言い訳を考えていると、なぜか父上から武術なら僕が教えようか？と打診があった。

ちょっと料理が出来るだけの一般庶民だと思っていた父上、だが昔は傭兵だったらしくかなりの腕らしい。

それなら丁度いいと思い、早速父上に武術を教えて貰うことにしたのだが……

（ちょ、父上。かなりどころかメツチャ強いんですけど、）

この間賊を退治しに行った將軍さんを見たら女性だったので（ちなみに偉い人はほとんど女性）、この世界は恋姫の世界だと確信していたんですけど……なんで男の父上がこんなに強いのか？。

こっちは、まだ最近練習し始めたばかりとは言え《念》で体を多少は強化しているのにつ！

僕は必死に棒を当てようと振るいつけているので、疲れが出始めるが。

「おおー、すごいね信！まだ五才なのに、こんな動きができるなんてw」

父上は…全然余裕で僕の棒を、左手に持つ同じような棒で捌いています。

そう——受け止めたり、弾くのでは無く捌く。

僕の振るう棒の勢いはそのまま軌道だけが、父の棒で書き換えら

れる。

「おや、もう気付いたのかい？早いねー。

この護剣術は僕が傭兵をしていた頃、大陸の西から流れてきた傭兵仲間から教えて貰ったんだ。

たしか、そいつは届かざる左の護剣マン・ゴーシュって呼んでたかな？」

僕はその話を聞いたとき確信した。

きっと父上が、管理者にお願いした武術の師匠なのだと。

それから僕は、父上にお願いで護剣術を教えて貰うことになった。最初は短刀の持ち方から始まり、相手の武器を捌く技術や注意点などを事細かく丁寧に教えてくれた。

ある日、教えてくれた理由が気になったので父上に聞くと。

「今の世の中、こういうものは覚えておいて損は無いからね」

と教えてくれた。

確かにこの間、うちの店に料理を食べにくる行商の人が最近賊が増えてきて物騒になったと父上に愚痴っていた。

「それに…」

「？」

「大切な人を護れるぐらいの力が必要だろ？w」

そう言った父上の顔は、男の僕でも惚れそうなぐらい格好良かった。

そんなこんなで月日は過ぎて、そろそろ十才になる。

あれから五年も父上との修行を毎日続けている僕ですが、たまには友達と外へ遊びに行くこともあります。

今日は隣の家の陸抗ちゃんや近所の子供達と遊ぶため、街外れの川へ遊びに来ています。

子供達が川へ向かうのを見送った僕は、近くの木陰でみんなが遊んでいるのを眺めています。

もちろん、保護者として（精神年齢はもう30になる）みんながケガをしないようにです。

ええ、そうですとも、決して幼女を見て和んでいるわけでは在りません！。

そんな事を考えていると誰かが話しかけてきた。

「しいちゃん！おサカナがいっぱいいるよー！」

「そんなに大きな声を出したら、サカナが驚いて逃げちゃうよ？」

今、舌っ足らずの声で僕の事を”しいちゃん”と呼び、話しかけて

きている女の子はお隣の陸抗ちゃんこと香ちゃん。（真名を交換したので、信の”し”をとって”しい”と呼んでいる）

サラサラした長い髪がかわいらしく、やさしい性格なので近所の男の子にかなりの人気だ。

お隣と言うこともあってか、昔から僕と良く遊んだり話をしたりしている。

香ちゃんには親戚に陸遜ちゃんという仲のいいお姉さんがいるらしいが、今は遠くの街に行ってしまったって会えないらしい。

まあ、その話を聞いてこの世界は恋姫の世界だと確信することが出来た。

「しいちゃんもいっしょに！いっしょにおサカナみよ！」

「はいはい、分かりましたよお姫様」

「~~~~~♪」

僕が返事をしながら香ちゃんの隣へ歩いて行き、隣へ腰をおろすと隣から嬉しそうな声がした。

ふと、声の方を見ると彼女はとでも嬉しそうな顔をしていたので、僕も何だが嬉しくなってしまった。

そのとき、僕は油断していた。

街から遊びに出るとき父上や門の衛兵のおじさんから、街の近くでも危険だから注意するように言われていたのに……………。

「「きゃーっ！っ！」」

「「こら、ガキ共！おとなしくしろ！」」

「おい、ガキに傷を付けるなよ。
大事な商品なんだからな。」

「（おっ、あそこのガキ二人かなりの上玉だな）
その嬢ちゃん二人！お友達にケガをさせたく無かったら、さっさとこっちへ来い！」

（じよっ、嬢ちゃん?! 僕は男だ!）

一緒に川へ遊びに来ていた子供達が、人相の悪い三人の男に掴まり刃物を突き付けられている。

「しいちゃん………」

香ちゃんの震えた声を出しながら、僕の腕をつかんでくる。

僕は落ち着かせるように、やさしく彼女に囁くように言った。

「香ちゃん…大丈夫だよ。」

さっきの悲鳴が衛兵のおじさんにも聞こえたはずだから、すぐに兵隊さんが助けに来てくれるよ」

そう、ここは街の門から離れていないので先ほどの声が聞こえたはずだ。

今も子供達が泣いているので場所もすぐにわかるだろう。
そのことが分かっているのか、男達も慌てている。
なかなか動かない僕たちにしびれを切らしたのか、ついに男達は行動を起こした。

「早く来いって言ってんだろうが！

お前らも泣いてないで、あいつらに来るように言え！」

そう言って男は、一人の子供を蹴り飛ばした。

（————っ！？）

そのとき僕は。

蹴り飛ばされて、動かなくなった子供を見て。

怒りで目の前が真っ赤になり。

気がつくつと、男に殴り掛かっていた。

第2話（後書き）

書くこと無いんで人物紹介でもしますか。

・人物（漢字が文字化けしてしまうので当て字を使用）

姓

名

真名

主人公

..羊 枯（よう こ）

一叔子一（しゅくし）

信

父

..羊 懂（よう どう）

一伯？一（はくかい）

優

..蔡 綺諭（さい きゆ）

一貞姫一（ていき）

母 縁

幼なじみ..陸 抗（りく こう）

一幼節一（ようせつ）

香

wikiペディアから名前をコピーしたら、友達に漢字が文字化けしてると言われたので当て字を使っています。
ほかに文字化けしてたら言ってください。

第3話（前書き）

誤字とかあったらすいません。

第3話

SIDE 陸抗(香)

しいちゃんは、はじめて会ったときから”ふしぎ”な子でした。

まるで女の子のような：とてもかわいい顔をしていて、思わず本当に男の子？とうたがってしまうほどでした。

かみも長くて、とてもきれいな黒いサラサラしたかみの男の子でした。

女の子みたいな見た目だけど、足がはやくて全然つかれないので、追いかけてこではいつも負けてしまいます。

いっしょにあそんでいるときの顔は、いつも女の子みたいな顔でわらっています。

でも時々しいちゃんは、まるでお兄さんのような顔で私たちが遊んでいるのを見ているときがあります。

そのときのしいちゃんの顔はとても優しい顔で、わたしはその顔を見るといつも体がぼかばかしてしまいます。

わたしはそんなやさしいしいちゃんが大好きで、みんなもそんなお兄さんみたいないしいちゃんが大好きです。

でも、そんなやさしい顔をするしいちゃんが今、とても怖い眼で男の人をにらんでいます。

さっきまでわたしに、少しこわい顔だったけどやさしい目で「大丈夫だよ」と言ってくれていたしいちゃん。

理由はたぶん、いつも遊んでいるお友達の女の子がけられてしまったから。

そのあとすぐに、いつものいいちゃんから感じていたあったかいものが、とても冷たくなるのを感じました。

女の子がけらるのを見てすぐは男の人たちがとてもこわかった。けど……今はあの男の人たちよりも、いいちゃんのほうが……。

（こわいっ………！）

そんなことを思ってしまったからでしょうか。

いいちゃんは、ゆっくりとわたしからはなれて、男の人たちの方へ歩いていきます。

そのとき、わたしはいいちゃんがどこか遠くへ行ってしまうようでこんなに近くにいるのに、今はいいちゃんがとても……とても——遠くに感じた。

S I D E O U T

S I D E 賊の男

その仕事は簡単に終わるはずだった。

この街での仕事を終えた俺たちは次の盗みの仕事をほかの街で探すために街を出たところだった。

そこで、たまたま見つけたのだ。

街外の近くにある川でで不用心にもガキだけで遊んでいるのを。その光景を見て、次の街での初仕事ガキの売買に決定した。

仲間三人でやればガキの五人や六人、捕まえるのは簡単だと思っていた。

ガキ共に気づかれないように森の中を通り近づいた。

ある程度近づいたところで、逃げられないよう素早く森から飛び出した。

しかし、捕まえる時予想以上の悲鳴をガキに出させてしまった。

（くそっ、今ので街の奴らに気付かれたか？）

俺は、仲間がガキを傷つけないように注意しながら街の方を警戒する。

すると仲間の一人が、少し離れたところにいる二人のガキに此方へ来るように言っている姿が目に入った。

（あれは、かなり高値で売れそうだな。

将来いい女になりそうだ。

いやまったく、売るのがもったいないぐらいだぜ）

しかし、その長髪で黒髪のカキと、同じく長髪で緑がかった髪のカキは動こうとしない。

いつまでも此方に来ないガキに苛ついたのか、捕まえたガキの一人を蹴り飛ばした。

（っ！ばかやろう、傷を付けるなど行つたのに！

大事な商品だとあれほどっ——————！？）

そう思った瞬間俺は、真冬のような肌寒さを覚えたと同時に体が震えだした。

(なっ、なんだこりゃ?! いったい何だってんだ!)

咄嗟にその原因を見つかるべくあたりを見渡す。

するといつの間にか黒髪のがキがいなくなっていた。

そして、いつの間にかその黒髪のヤツが、ガキを蹴飛ばした仲間の前に移動しているを見つけた。

ヤツが、ヤツの目の前にいる仲間を殴った瞬間、俺の仲間は…………。

「……………え？」

いや、すでに仲間だった”モノ”は…………臓物をまき散らして赤い花を咲かせていた。

それからガキはもう一人の仲間を蹴り飛ばし、仲間は木に叩き付けられてそのまま動かなくなった。

その光景の後、俺が最後に見たのは、そのガキの泣きそうな顔とそいつの拳だった。

S I D E O U T

(————っ!?)

僕が怒りから醒めたのは、怒りにまかせて拳を振るった後だった。

どうやら、無意識のうちに殺意を込めたオーラを男達に飛ばしながら、男の目の前に移動し。

子供を蹴り飛ばした男を四大行の応用技、《硬》で殴って上半身を吹き飛ばしてしまったらしい。

少し冷静になった僕は、子供達が乱暴されないように残りの男達の意識を刈り取るため動いた。

男達は目の前の状況を信じられないのか、うつろな目で僕が吹き飛ばした男を見つめている。

僕はすぐさま《纏》の状態へオーラを戻し。

今も啞然としている男の一人を蹴り飛ばし、もう一人はその顔面に拳を叩き付けてやった。

この短時間で僕が作った物は、意識を失った二人の男とすでに肉の塊になった一人の男だった”モノ”。

もっとも酷い上半身を吹き飛ばされた男の周囲は、いつの間にか降っていた雨でその塊からしみ出た血が広がり一面が真っ赤になる。

それと同時に飛び散った血と臓物による血生臭ささもあたりに充満していた。

僕はその光景を一別した後、雨の降り出した空を仰ぎながら思わずため息をついた。

「……………ハア。

（あんなにいい天気だったのに……………な）」

そして回りを見渡すといくつもの視線が僕を貫いていた。

助けたはずの子供達は、僕に恐怖の目を向けていた。

そう……。

男達が現れるまで、笑顔を向けて来てくれていた香ちゃんまで……

……。
ほかの子達と同じ目で僕を見ていた。

” 化け物 ” と――――！。

第3話（後書き）

早く原作の時期に入りたいのに、入れない。

よし、飛ばそう。

第4話

それから僕たち家族は、洛陽へと引っ越す事になった。
理由は二つ。

一つ目は僕があ的事件の場所を見ると、人を殺してしまった事を思い出してしまいうから。

あの後、悲鳴を聞き付けた数人の衛兵が僕たちを見つけ、何があったのかと僕に尋ねてきた。

子供達は酷く脅えていたので、落ち着いているように見える僕に説明を求めた方がいいと考えたのだろう。

衛兵の人に、男達が僕たちを攫おうとしたこと、そして、男達は僕が殺したことを話す。

起きたことを話し終えると、僕は子供達をこれ以上脅えさせないために衛兵の一人と一緒に街へと戻った。

家に帰ると安心したからだろうか。

急に人を殺してしまった恐怖や罪悪感が襲ってきた。

あまりの恐怖に押し潰されそうになり、僕は泣きながら胃の中の物をすべて吐いてしまった。

その光景を見た両親は。

「信、大丈夫よ。」

あなたはお友達を助けるためにしたのだから。
だから罪の意識に………恐怖に負けないで？」

「信……、今のその気持ちはとても大事な物だ。

だから、それに慣れちゃいけない。

慣れずに背負うんだ……その罪を忘れないように。

その罪で君が潰れないように、僕たちも一緒に背負うから……」

そう言って二人は、僕の震えが無くなるまで、優しく抱きしめてくれた。

しばらくそうしていると、いつの間にか体の震えは止まっていた。

そして、二つ目の理由……。

それは、僕が子供の力とは思えないような力で男達を殺してしまつたため、街に居づらくなつたから。

街の大人達はその話を聞いても、いつも道理に。

いや、むしろ今まで以上に。

「友達を守つたんだって？ すごいじゃねえか！」

と言いながらみんな笑いかけてくれる。

しかし、大人以外の反応は違っていた。

今まで一緒に遊んでいた子供達が、僕を怖がるようになってしまった。

ふと、蹴られた子供の様子も気になったので見に行ったら、同じように怖がられてしまった。

きっとあの場にいた友達から僕が何をしたのかを聞いたのだろう。

それでも、その子の親御さんから大きなけがは無かったという話が聞けて無事が確認出来たので良かった。

それから次の日、一日で荷物をまとめ終わったので街のみんなに挨拶に向かった。

お世話になった人達に両親と共に挨拶をしていき、最後に香ちゃんに会いに行ったのだが。

しかし、香ちゃんはある日からの体調を崩してしまっただけ、会うことは出来なかったが。

（きっと、会ったらほかの子達と同じように僕を怖がるだろう）

なので香ちゃんには伝えず、陸さん夫婦に引っ越す事を伝え。

僕は両親と共に洛陽へ向かった。

S I D E 香

わたしが自由に動けるようになってすぐにしいちゃんに会いにいくと、もう引っ越しをした後でした。

あのとき、とても怖くて強かったしいちゃん。

でも、街にもどるときのしいちゃんは…とても悲しそうで…とても弱々しかった。

そんなしいちゃんを見てわたしは、怖いと思ってしまった自分がイヤになりました。

すぐにあやまりに行こうとしたけど、わたしはなぜかそこから動け

ませんでした。

それからしばらくして兵隊さんがお友達といっしょに家まで送ってもらい。

家に着いて、おとうさんとおかあさんの顔を見たたんわたしは倒れてしまったらしです。

二日後すっかり元気になったわたしは、すぐにしいちゃんに会いに行きました。

家にはだれもいませんでした。

わたしはすぐに家に帰っておとうさんとおかあさんに聞きました。

「おとうさんおかあさん！

優おじちゃんと縁おばちゃんが……。

しいちゃんが……しいちゃんが、いなくなっちゃった……。」

「信くん達は、信くんのお父さんが昔お店を開いていた洛陽という遠くの街へ引っ越してしまっただ」

「ごめんなさいね。

私達は見送ったのだけど……香ちゃんは体調が悪かったから言わなかったの」

そのことを聞いてわたしは泣き出してしまいました。

もう、しいちゃんに会えないと思ってしまいました。

でもおとうさんとおかあさんは教えてくれました、もう会えなくなるわけじゃないって。

遠い場所だけど、大きくなればまた会えると。

（いつか……いつか絶対にまた、しいちゃんと……）

大きくなったらまた会えるように。

（あの、あったかい笑顔がみれるように——）

今度はわたしが守ってあげられるぐらい強くなって。

（もう、あんなかなしそうな顔をさせないように——）

今度会ったら絶対に伝えなきゃ。

（ごめんなさいってそして——）

——助けてくれて、ありがとうって！)

S I D E O U T

あれが………洛陽。

建業の街を出てから数ヶ月。

ようやく目的の街が見えるところまでやってきた。

ここまで来る途中何回か盗賊に襲われた。

戦えない母上と荷物を守るため、僕と父上が盗賊を追い払う事になったのですが。

盗賊を見たとき、また殺してしまうかも知れないという恐怖のせいで体が動かなくなっていました。

その隙を突かれ数人の盗賊を母上のいる後方へ行かせてしまった。それを見た僕は、母上を守るために何とか体を動かして追いついた盗賊達の背中を蹴り飛ばした。

その時何人か殺してしまったが、あのときのように恐怖と罪悪感に押し潰されるような事は無かった。

今でも人を殺すことに恐怖は在るが、あの時よりも心が軽いのはお

そらく、僕が罪に苦しんでいた間必死に支えてくれた両親のおかげだろう。

さて、そんなこんなで洛陽にたどり着いた僕たち家族は街の門で荷物の確認を済ませて、父上が閉めっぱなしにしているという店へ向かうため歩き出す。

始めて入った洛陽は、建業と比べてとても大きく。

その大きさからして多くの人が、この街で暮らしてるのが分かる。シルクロードから流れてきた物だろうか、露天ではこの時代の中国には無いような物も売られている。

そんな珍しい店々を、お上りさんのようなワクワク顔で見渡しながら新しい新居へと向かう――――

家の大掃除が待っているとも知らずに。

第4話（後書き）

最近、妄想で小説を書くことに限界を感じた。

主人公設定？

主人公 … 羊 枯 一 叔 子 一 (し ゅ く し) 信

	統率	武力 (念 発 動)	知力	政治	魅力
素質	90	64 (未 知 数)	84	87	
89					

水軍	槍	劍 (短 刀 の み)	弓	騎	無手
----	---	---------------	---	---	----

適性	B	B (S)	B	A
S				

念系統 強化系

備考…父親に似た優しそうな目と、母親に似た美しい容姿が合わさって、かわいい男の娘な容姿で、良く女性に間違われる。(本人はもっと男らしい容姿が良かったらしい)

父から武術を習い、念も使えるのでかなりの実力。

だが目立って名前が売れるとメンド臭そうだし危なそうなので、あまり実力を出したがない。

そして、なぜか軍部では変装？している。(包帯巻いた志々雄さんのカッコに)

将来の夢は、かわいいお嫁さんを貰って両親に親孝行をしながら平和に暮らすことらしい。

しかし、重要な場面で押しが弱く流されやすい性格。おかげで最終的には目立ってる。

※統率などはk○eiさんの三〇志11の数字を使わせて頂きます

た。

第5話（前書き）

ギャグっぼいを書きたかったのに……。

第5話

さて、この洛陽という街に来てはや七年が経ち、もう十七才になりました。

精神年齢はすでに三十を過ぎ、いつの間にか純血を守り抜いた物だけに与えられる——魔法使い——という称号で呼ばれる年齢になっていた。

……とりあえず精神年齢のことは置いて、今までの生活について話そう。

この七年間での生活は、おもに両親の店を手伝ったり、空いた時間で父上と組み手をしたり、一人で《念》の修行をしたりした。

修行の方は父上からは届かざる護剣のほかにもう一つ教えて貰ったが、これから先使う機会もあるはずなのでそのときに話そうと思う。

そんな事を七年も繰り返して来たおかげか基礎筋力は前世では考えられないぐらいに上がり、念もかなり上達した。

しかし、基礎筋力が上がっているはずだが依然として体の線は細いままで、おそらくサ○デーで読んだ最強の弟子に出てきたピンク色の筋肉と言う物が鍛えられているからだろう。

おかげで今でも初対面の人達に女性だと間違われr……。

えーっと、《念》の話に移りましょう。

四大行とその応用の《纏》(てん) 《絶》(ぜつ) 《練》(れん)

《発》(はつ) 《凝》(ぎょう) 《隠》(いん) 《周》(しゅう)

《円》(えん) 《堅》(けん) 《硬》(こう) 《流》(りゅう) は、

なかなかの実力に成れたと思う。

《隠》は完全にオーラを遮断出来るまでになったし、《円》は現在貰った素質のおかげか半径が四丈ぐらい（現代での8 mぐらい）まで可能になった。

原作でもノブ○ガが4 mが限界と言ってたので、自分でも頑張ったほめてやりたい。

《流》も戦闘では支障が出ない程度の速度で出来るように、毎日繰り返して全身に覚えさせた。

理想は自転車で無意識に平行感覚をとるように、意識することなく《流》が行えること。

あと、技なども《円》を利用した制空圏や、右手だけだが二重の極みも使える用になった。

そして毎晩寝る前に、《練》でオーラが枯渇する一歩手前までオーラを消費していたので、オーラ総量も増えてきた。
なのでそろそろ、《発》を作り始めようかと思う。

この間久しぶり店の手伝い中暇だったので、空いた客席で飲み水を器に入れて《発》の練習をしたら、器から水がドバドバ溢れてしまい母上に『大事な飲み水で遊んじゃメツでしょ？』と怒られてしまった。

（母上、犬猫じゃ無いんだから………）

つとまあ、そう言うわけで修行は順調に進んでいると思われます。

そうやって店の手伝いと修行を毎日繰り返していると、ついに黄巾党が出始めたという話を聞いた。

正確には黄色い巾を巻いた賊の集団らしいが、まず黄巾党で間違いないと思っている。

それに伴って囁かれる、管輅という占い師による予言”天の御遣い”の噂も広がり始めた。

（ついに原作が始まる頃か）

そしてそんな話が洛陽に広まり切った頃、ついに徴兵の話がうちにもやってきた。

昔の洛陽ではそんな事は無かったのだが、靈帝様が死んでしまったあとの洛陽は十常侍じゅうじょうじと呼ばれる宦官が政を牛耳っているため、目に見えて治安が悪くなった。

街では十常侍の権力を笠にきた部下が人々に賄賂を要求し、賄賂が払えないとその家の若い娘が、娘がない場合は男が兵として連れて行かれる。

幸いうちには若い娘なんかいないので、僕が兵として徴兵されることになった。

うちに来たとき奴らが僕を娘と間違えて連れて行きそうになったのは、奴らの目が腐っていたと思いたい。

（父上、母上、なぜ『娘がいるじゃねえか』と言われたとき否定ししてくれなかったのですか？）

奴らは男だと分かった僕に興味を無くしたのか（一人あつい視線を送ってきていたが…）、日没までに兵屯所に来いとだけ言い残し去っていった。

その後、手早く準備を済ませていつもの格好で兵屯所に行こうとすると両親は。

「『その格好だと危ない!!』」

などと言って僕の顔に包帯を巻き始めた。

（（そんな女の子みたいな顔で行ったら襲われる!!））

危機迫る様な顔をした両親に突然ミイラの様な格好にされた僕は。

「死んでは駄目よ？絶対に生きて帰って来なさい」

「母さんは僕が守るから、安心して逝ってこい！」

という暖かい言葉？をいただき送り出された。

途中、ミイラの格好が気になったので、どうせならと思い何とか志

○雄さんのように変えた。

腰まで在る黒髪が出っぱなしだが、とりあえず軍ではこの格好をしていようと思う。

これならもし戦で目立っても包帯姿の印象が強く残るはず。

なので包帯を取って普通にしていれば、名前を出さない限り気づかれることはない……はずだたぶん。僕はそう信じている。

それに包帯を体に巻かれている時、《発》のアイデアも浮かんだし……。

（この包帯を《念》で強化すれば、もし作り手の《念》が込められた武器で斬りつけられても大丈夫だろう）

どこで体全部に包帯を巻こうかと考えながら、兵屯所へと入った。入って早々に顔の包帯ことを聞かれたが、ケガだと言い張った。

さて、それから無事に？兵として徴兵されて、僕と同じように新兵として連れてこられた人たちと一緒にいます。

この調練場に集まっているのは、大体百人ぐらい。

中には街で見かけた事のある顔もちらほら見受けられますが、今は顔に包帯を巻いているので僕だとばれていないようです。

どうやらこれから、部隊を二つに分けて陣形の調練をするみたいです。

銅鑼の音を合図に、先ほど古参の部隊長から教わったいくつかの陣形を繰り返す。

全員同じ格好なので、まるで運動会の様だ。

僕も今の格好は回りにいる皆さんと同じ鎧を着ているのでほとんど同じ、違うところは右腰に短剣を下げていることと、鎧から出ている顔と手から包帯が見えるぐらい。（ちなみに鎧を着るときに包帯を体全体に巻きました、これでリアル志○雄さんです。）

しかし今頃になって包帯を巻いた外見に気が付いたのか、回りの新兵さんたちがチラチラと此方を見てくる。

そんな新兵さん達の中には、なぜか女性も混ざっていて………しかも同じ新兵の男より強いみたいです。

もしかしたらと思い、《凝》で視てみる事に。

（ふむふむ、女性の方がオーラ量が多いみたい）

今までも街の人達を時々《凝》で視ていて思っていたのですが、どうやらこの世界の女性達は先天的にオーラ量が男性よりも多いらしい。

ということは、ゲームでなぐーじゃなくて楽進殿が使っていた”氣”は《念》の様な物なのかも知れない。（僕もこの世界の住人なので真名は呼ばないようにしている）

（なら彼女は放出系？でもあの性格だと強化系だと思うけど――）

などと考えながら陣組を繰り返していると。

先ほどから黙って高いところから此方を見ていた将っばい人が大声で喋り出した。

「新兵諸君！

諸君らにはこれから何大將軍の精鋭と共に賊と戦って貰う！
国のため、帝のためにその力を振るってくれ！」

（――――え？）

と言うわけで、早速何大將軍の精鋭？と共に黄巾党の討伐へとかり出される事になりました。

（……陣組や武器の扱いさえまだ満足に訓練してないのに、いきなり実戦ですか。
イヤな予感しかないなあ）

そんな事を考えながら遠征の準備をするのでした。

第5話（後書き）

会話が少ない（・ω・）
擬音が書けない、もう駄目だ。

第6話（前書き）

やっと会話が書ける様になりました。
そしてついに恋姫キャラも登場。（名前だけでも

第6話

兵士になって早々、大將軍の精銳と共に黄巾党をしばきに行くことになってしまった僕たち新兵部隊。

なぜこんな事になったかと言うと、なんでも帝から『天下を乱す黄巾賊を討伐せよ』という勅命が下ったらしく。

そのせいで日和見だった諸侯が本気で黄巾討伐にのりだしたのだ。しかし大將軍様は諸侯に手柄を取られるのを我慢できないらしく、自らも軍を率いて黄巾党を討伐することで手柄を得るつもりらしい。

そして遠征に出る当日、『兵の数が少ない、見栄えが悪いから増やせ』などと言う無能っぷり。

おかげで満足な訓練も出来ずに僕たち新兵は遠征に出されてしまった。

（ホントに迷惑な話だよ）

そんな無能の何大將軍を先頭にその後ろを精銳部隊とやらが、最後尾を我々が新兵部隊が長い列を作って歩いていきます。

その精銳部隊ですが、『凝』でオーラを視る限り強そうでは在りません。

もちろん、先ほどチラッと見た何大將軍（ちなみに男性でした）も全然一般人と同じようなオーラでした。

《念》が使えなくてもオーラの流れが綺麗な人は例外無く強い。僕の父上も綺麗なオーラの流れをしておりやはり強かった。

なので。この目の前に見える部隊がとても精銳だとは思えない。

いや、そもそも正規の官軍なのかすらあやしい。

この軍だけなら、本当に戦になるのか心配になります。

しかし、その心配を無くしてしまうものが僕たち新兵部隊の後ろにある。

それは”董”の旗を持った一つの長い行列。

先頭を馬に乗り歩くのは、西涼から援軍に来た董卓軍の将達。

その中には、正史ならまだいないはずの張遼將軍に華雄將軍も見ることが出来た。

しかし、どうやら董卓殿やそれ以外の将はいらっしゃらないようで、自領を守るためか来ていないようだ。

（確かに、あの二人さえいれば黄巾党なんて相手にならないだろう

—————いや、むしろオーバーキルかも……）

まさに精鋭ともいえる騎馬を主体にした軍を率いる二人からは《凝》を使うことなく、そのオーラをまるで視覚出来るかの様な錯覚を覚える覇気を漂わせながら進む。

その姿は、まさしく歴史に謳われるような猛将と…豪傑といえるだろう。

ゲームでは残念な人だと言われていた華雄將軍もこうして実際に見ると、とても残念な人には見えない。

彼女らとその軍がいれば、この戦での死亡率は大きく下げる事が出来るはずだ。

実質、董卓軍を見る前の新兵隊の士気はダダ下がりで今にも瓦解しそうなぐらいだった。

だが今では見違える様な士気で歩みを進めている。

さて、そんな恐ろしい後ろの軍団に急かされるように移動すること
数日。

この数日間、似たような景色で飽きてしまった僕は、空を見てぼー
っとしながら行軍してた。

すると、前の人が急に立ち止まった。

回りを見渡すと軍全体が立ち止まっている。

「急に止まりましたけど、どうかしたんですか？」

前を歩く新兵仲間のおじさんに話しかける。

「さあ？、内容は分からんが少し前に後ろから伝令兵が將軍のい
る方へ行ったから何かあったんじゃないか？」

「なるほど………伝令兵ですかあ」

「まあ、一兵卒のおれたちにゃー関係ないことだがな」

「はははは………、そうですねえー」

彼は牛金さんといい、街で鍛冶屋を営んでいたらしいが、賊が増え
たせいで材料が街に入り難くなってしまい、仕事が出来なくなり賄
賂が払えなくなったのでここにいらしい。

職人らしい熊みたいな外見だが、最初は僕のこの姿を不気味がっ
ていた。

だが今では普通に会話するぐらい仲良くなりました。
それから、おじさんとこれからどうなるのかと話していると、部隊
長から伝令の詳細が伝えられた。

どうやら、ここから少し行ったところに黄巾の軍団がいるのを”董
卓軍”の斥候が見つけたらしい。

”董卓軍”の斥候がね！、大事なんで二回言いました。
ちなみにうちの大將軍様はそんな物出してません。

とりあえず、目の前に黄巾党がいると分かったので両軍の将が集ま
り軍議をしてるらしい。

なので今のうちに武器の確認をしておこうとおもいます。

しばらくして、軍議で決定した作戦が伝えられました。

「これより何大將軍からの作戦を伝える！

『これより我が軍は正面から賊に突撃し、敵を殲滅する』
とのこと、各自戦闘準備を怠るな！」

(……………空が青い)

おつといけない、思わず現実逃避してしまった。

どうやら大將軍は本物のお馬鹿さんらしい。

いくら相手が賊だと言っても、まさか正面突撃だとは思わなかった。
將軍の仕事は兵を失わないように戦う事じゃないんですかね？

まったく、僕たち新兵部隊を任されていた部隊長も作戦を聞いて啞
然としますよ？。

「さてと、では部隊長殿？　僕たち新兵隊はどうすればいいんです
か？」

「……………」

どうやら声を出すことも出来ないぐらい驚いているみたいだ。
回りの新兵さん達もフリーズ状態で固まっている。

みんなが固まっているので戦の前に《発》の最終確認をしておこう。
《発》はこの十数年間オーラ総量を増やす修行を続けたおかげで、
いくつか作ることが出来た。

まず一つ目の《発》は体中に巻いた包帯を強化するというものです。
まあ……包帯に《周》をやっている様なものですし、直接体を強化
した方が効率良さそうですけど……。

体を強化すると筋力とかだけじゃなくて、防御力とかもあがっちゃ
うんですよ。

生身で剣を受け止めたりとか……………。
無理w、そんな事したら妖術使いとか言われて捕まって殺されちゃ
います。

まだ『この包帯は龍の皮膚から作られてとっても頑丈なんです
よ?』とか言った方が、この世界の人は信じてくれると思います。
以上の理由でこの《発》を作りました。

次に二つ目。

二つ目は治癒系の《発》で【超瞬間回復^{ヒーリング}】と銘々しました。(セン
ス無くてすいません)

これは本来体が持っている治癒能力を強化するものです。

ちなみに、念の効果を上げるために使用中、治療箇所以外は強制的
に《絶》になるようにしました。

おかげで致命傷な傷も短時間で直す事が可能です。

この能力のおかげで余程のが無い限り死ぬことは無いはずです。

この能力は別に見られても平気でしょう、この世界には華佗殿の様

なスーパードクターがいることですし。

傷が一瞬で治っても不思議ではない！ たぶん！

そして、三つ目です。

これは神経伝達速度の強化をして、擬似的に体感速度を遅くするもので、要するに回りが遅く見えます。

名前は【神経伝達速度強化へギア・アップ】とでも呼びますか。もちろん名前の通り早く動くことも出来ます。

しかし、これは長時間使えないので集団戦の時は使いません。使うとしたら一騎打ちとかでしょうか……。

最後に四つ目。

これは牙突と二重の極みを組み合わせた《発》で必殺技の【牙突・肆式】。

まず、牙突は足にオーラを集中させ目標に向かってジャンプし、片手平刺突という突きを繰り出す技。

片手平刺突とは、刺突をはずされても間髪入れずに横薙ぎの攻撃に変換することが出来る様に刃を水平にする突きと、確か斉藤さんが言っていました。

このときの突きは武器による刺突でも拳打でも可能です。

二重の極みは、刹那の瞬時に二度の衝撃を打ち込み、第一撃目は物体の抵抗で緩和されるが、第二撃目の衝撃は完全に物体に伝わるため、石や木でも粉々に粉砕することができるという必殺拳。

しかし、生身では無理だったので神経伝達強化を使って可能にしました。

この二つを組み合わせ、殴る時に《硬》を使ったらどうなるか……。

だたの二重の極みで石を粉碎出来るのに……考えただけでも恐ろしいです。

ちなみに牙突は本家で、通常の牙突・壺式、斜め上から突き下ろす正真正銘の牙突・式式、

対空迎撃用の牙突・参式。

そして奥の手で、間合いの無い密着状態から上半身のバネのみで繰り出す強力な牙突・零式がある。

技が牙突メインな理由ですが、僕が余った対価でもらった『適当にその世界で使えそうな才能』がどうやら〈牙突〉を使う才能みたいです。

試しに抜刀術や二刀流など、他の技も試したんですけど……、父上から才能が無いと言われました。

まあ、確かにマン・ゴッシュも〈ギア・アップ〉を使わないと成功率がガタ落ちしますからね。

なので、防御は〈ギア・アップ〉を使った状態でマン・ゴッシュ、攻撃は体を強化して牙突という戦闘スタイルです。

さて、そろそろ皆さんもフリーズから戻って来たでしょうし。

僕も戦前に武器の最終確認を始めましょうかね。

第6話（後書き）

知らないうちにユニークが凄いことに。

読んでくださった皆さんありがとうございます。

そしてお気に入り登録してくれた方もありがとうございます。

第7話（前書き）

ようやく恋姫キャラの会話が書ける様になりました。

第7話

ついに戦闘が始まった。

今回の作戦は、右翼に張遼軍、左翼に華雄軍、そしてその中心に本隊の何進軍を置き、僕たち新兵隊は本隊の最前線に置かれた。

戦が始まったばかりは官軍が押していたのだが、時間が経つにつれ黄巾軍に押され始め。

今現在、大將軍がすぐそこに見えるぐらいにまで押し込まれてしまった。

「はっ！ 官軍なんざこの程度か！！」

「押せ押せ！ このまま官軍の奴らを皆殺しにしろ！！」

「ヒャツハー！！」

官軍の前線が崩れた事により勢い付いた目の前の黄巾賊が吠える。

「ハアツ——ツ！」

ザシュツ！！

「ぐああっ！！」

（さて、どうするか……………）

僕は今、前線にいる新兵隊の一番前に出て黄巾の奴らを剣で斬り倒している。

最初のうちは槍で戦っていたが、押し込まれるにつれて間隔が狭くなり槍が使えなくなってしまったからだ。

しかし街で鎧と一緒に支給された剣は、素人目に見ても質が悪く、二・三人斬ったらず刃が潰れてしまうような粗悪品だ。

刃が潰れないように注意して使っても、人を何人斬ると血や油で斬れ味が鈍ってしまうので、剣に薄く《周》をしながら使っている。おかげで剣の斬れ味が悪くなることが無い。

（しかし、それにしても数が多い……）

敵の多さに、思わず両手で持った剣の柄に力がこもる。

僕一人なら何とでもなるが、回りの新兵隊のみんなを守りながらなので思うように倒せない。

「ぐわあ！ 助けてくれえ！」

「——っ！」

声の方を見ると、少し離れたところで黄巾の男に刺されそうな牛金さんが見えた。

「くそっ！ 間に合え！」

——ヒュオオンッ！

僕は咄嗟に剣を黄巾の男へと投擲した。

内緒で練習していた鉄甲作用を使って投擲した剣は、男に刺さった後その勢いを失うことなく男の背後にいた数人ごと吹き飛ばした。

まあ、もちろん《念》で等加速度運動を強化して投げるという偽物の鉄甲作用である。（埋葬機関秘伝の投擲技法の原理なんて知らない

いで)

投擲すると体から離れるので放出系も必要になり、本来の八割程度の効果しかない。

「牛金さん！ 大丈夫ですか！？」

「あ……ああ、すまねえ！ 助かった！」

剣を投げてしまった僕は、回りに落ちている剣を素早く拾い上げオーラをまとわせる。

それから数え切れないぐらい敵を倒したが、奴らは倒しても倒しても後からどンドン湧いて出て官軍の兵を少しずつだが確実に刈り取っていく。

おかげで陣の中核を担う僕ら本隊は今もおどんどん押し込まれて行く。

「何大將軍！ このままでは前線が持ちません、ご指示を！」

《念》で戦闘のために聴覚と視覚を強化していたおかげでかなり後ろからの声も聞くことができる。

「ぬうつ……、俺は撤退する

右翼と左翼の連中には殿しんがりをするように伝えよ！」

「はっ！」

どうやらやっと撤退するらしい、しかも自分だけ。

SIDE 右翼張遼軍

「張遼さま！ 本体、左翼、共にもう限界です！」

「ちいっ！ あほ何進め……こないな無茶な作戦で黄巾の連中に勝てると思うたんかいな……
くそっ！ 撤退するで！」

何進のうかつさに苛つく張遼。

部下からほかの隊の状態を知らされ、即座に撤退の判断を下す。
しかし、本隊へ撤退要請を送る前に本隊から伝令が届く。

「本隊から伝令！ ここが正念場だ、踏ん張れ、奮戦せよ！ だそうです！」

「あんのバカ……！ もう正念場なんぞとつくに終わつとるっちゅうねん！」

今もなお戦況が見えていない何進からの命令に張遼はさらに機嫌を悪くする。

「もうええ、お前ら、ウチの指示に従い！ 責任はウチが全部とる！ 撤退や！」

「よろしいので？」

「かまへん！ ウチら右翼は戦線の維持不可能につき撤退する！」

何進にそう連絡し！ 撤退や！」

「はっ！総員、撤退！ 撤退——っ！」

速やかに撤退を開始する右翼軍。

そして、それを追う黄巾の軍団を眺めながら張遼は思わず呟く。

「……………けど、黄巾の連中

ここまで規模が膨れあがったら……………野盗や暴徒どころか、その辺の軍隊と変わらへんで？」

そんな事を考えいると、突然銅鑼の音があたりに響き渡る

「な……………っ！何や、賊の増援か！？」

「いえ！ 旗印は曹と夏侯！ おそらく陳留の曹操の軍かと思われ
ます！」

「今頃か……………っ！ まあええ、連中の相手は何進がやってくれる
やろ

ウチらはとっとと撤退すんで！」

「將軍！ 本隊より伝令！ 我が右翼に、左翼の華雄將軍と協力し
て殿をつとめろとのことですよ！」

「華雄は！」

「進撃を止めている様子が見えませんが……………」

「それ、殿しんがりのうて、放置されとるだけとちゃうんか……………？」

何進もそうだが、同僚にも頭を痛める張遼であつた。

SIDE OUT

お肉屋さんの倅せがれの何大將軍を逃がすため……、ではなく新兵仲間を逃がすために僕はすこし本気を出すことにした。

右手を正面に突き出し《練》によって増幅させたオーラに殺気を込めて黄巾軍へと飛ばした。

「ぐっ……………！」

「なっ！　なんだ!？」

「ううっ!……………」

殺気を込められたオーラを浴びた黄巾軍は次々に恐怖で顔を青白く変色させ、中には気絶する者もいた。

「皆さん今のうちです！　撤退してください！」

突然止まった黄巾軍を見て戸惑っている官軍へ、そう声を出し撤退を促した。

僕の声聞いた彼らは、思い出したように撤退を開始した。

すると撤退する方向から銅鑼の音と官軍ではない兵士の掛け声が聞こえた。

どうやら陳留の曹操軍の援軍らしい。

撤退する僕ら官軍と入れ替わるように突撃する曹操軍は、その強さを見せつけるように黄巾軍を食い破っていった。

「なあ、さっき黄巾の奴らがいきなり動かなくなったが……どうしたんだろうな？」

その光景を見ていると牛金さんが話しかけてきた。

「さあー、僕たちの後ろに援軍が見えて驚いたんじゃないですか？」

「そうかあー、そうだよなあ

あんなに怖がってたし、よっぽどあの軍が恐ろしかったんだろうな」

僕に聞いてきたので、僕のやったことが分かったのかと思ったけど違ったみたいだ。

まあ、回りには僕が左手を黄巾に向けたぐらいにしか見えないからね。

「それにしても強ええな

特に先頭で敵をなぎ飛ばしてる、黒髪で大剣を持ったあの姉ちゃん……

ホントに人間か？」

「ホントですねえ………

（本当にこの世界の女性は凄いなあ、まるで人がgomっ!!）」

これはあの台詞を言えるチャンス!!

「見ろ！ 人がゴミの y 「お？ どうやら終わったみたいだぞ？」
.....ぐすっ」

こうして初めての戦は涙と共に終了した。

第7話（後書き）

今日の夜には8話もあげたいです。

第8話（前書き）

キャラの話し方とか難しい。
特に関西弁とか……

第8話

S I D E 曹操

今私は黄巾の軍団を食い破っていく春蘭の部隊を、隣にいる秋蘭と共に眺めてる。

「まったく……、官軍が苦戦しているようだからどれ程のモノかと思っていたのだけれど……」

「はい……」。

確かに先ほどの賊は、これまで殲滅してきた連中よりも手応えが無い様に感じました」

どうやら秋蘭も同じことを思ったようね。

そう、黄巾の連中は突撃してくる敵を見ても反応を起こす事無く我が精鋭に倒されていく。

……と、いうことは、あの官軍はそこいらの賊よりも劣っている連中に手こずっていたことになる。

けど、いくら国が腐敗していると言っても多少の訓練は行っているはず。

ならば私たちが来る少し前に、何か在ったと考えるのが自然。

「けれど、いったい何が……」

理由を考えるべく頭を巡らせていると、いつの間にか戦闘が終わっていたようで風が報告をしにやってきた。

「華林様、敵の掃討完了しました！」

「ご苦労様、風」

報告に来た風に労いの声を掛ける。

しかし、いつもなら報告を終えたとすぐに仕事に戻るが今日は違った。

「どうしたの？」

「はっ！ その……捕虜になった賊が妙なことを……」

いつもハッキリと話す彼女が、珍しく口ごもった。

「なにかしら？」

「それが、包帯を巻いた兵士に手向けられた瞬間、突然恐怖を感じ、あまりの恐怖に動けなくなったとか……」

動けなくなる……。

それは体を直接拘束される外的要因と、精神的な恐怖などで体を拘束する内的要因の二つが考えられる。

前者はその様な物が確認出来ないので、おそらく後者なのでしょうけど。

覇気や殺気を相手に叩き付けることで、十人ほどなら不可能ではない。

しかし、あの軍団すべてなど到底出来ることではない。となると、残った方法は……。

「何かの妖術かしら……」

「いえ、おそらくは”氣”に殺気を込めて相手に叩き付けたのではないかと

氣を極めればその様なことも出来ると、どこかで聞いた覚えがあります」

（と言うことは”氣”に付いてはかなりの者でしょう
もちろん武の実力も……）

まさか官軍にその様な者が居たなんて。

あとで桂花に言って調べさせなくてはならないわね。

「それでは華林様、これから隊長にも御報告をいたしますので私はこれで失礼します」

「ええ、ありがとう風

それと、一刀に会うなら後で来るように伝えて頂戴」

「はっ！ 了解しました」

そう言うて風は一礼をし、一刀いるところへ向かう。

包帯の兵……ね。

これから先、来るであろう戦乱の時代。

その時代で必要になるのはより多くの優秀な人材。

その者が手に入れば天下へと――我が覇道へと近づく。

「その者……ほしいわね」

それほどの才、ただの一兵卒にして置くには惜しい。

しかし、官軍ならば今は手を出すことができない。
そう”今”は…………。
けれど、近いうちに必ず手に入れて見せるわ。

「待っていなさい？ 包帯の兵よ——」
つわもの

S I D E O U T

S I D E 香

どうもお久しぶりです、陸抗こと香です。

私は一年ほど前から荊州の南陽で穩お姉ちゃんの手伝いのため、孫策様のところでお仕事をしています。

そして、今軍師のお二人と黄巾賊に付いて話し合っていたのですが……。

「——っ!!」

今、しいちゃんに何か良くないことがあった気がします!!

「香ちゃん、どうしたんですかぁ？」

「どうかしたのか、 香？
急に立ち上がったって」

穩お姉ちゃんと冥琳様が心配して声をかけて来ますが、今の私はしいちゃんの事で頭が一杯です！

（しいちゃん！　どうかご無事で！！）

——南陽では幼なじみ十女の勘が冴え渡っていた——

S I D E O U T

「へっくちゅっ！、へっくちゅっ！」

「なんだ？　お前その外見で……随分かわいいくしゃみだなW」

「むっ……ほっといってください！

昔からこうなんです！」

「はっはっは！　わりいな、別にバカにした訳じゃないんだW……
…っぷW」

「全くもう、牛金さん勘弁してくださいよお」

なぜか分かりませんが、いきなりくしゃみが出てしまい、牛金さんに笑われてしまいました。

（だれか、噂でもしてるのかなあ？）

あれから僕たちは、黄巾党との戦いで人数が減ってしまったため、一度洛陽へ戻るようになりました。
もちろん董卓軍の方々も一緒です。

そして今現在、僕はなぜか新兵隊の部隊長をやらせて貰ってます。なぜこんな事になったかと言うと。

あの戦いで前の部隊長が戦死してしまい。

そのことを直接何大將軍……には無理なので、その副官さんのところへ報告に行きました。すると

『なに？　新兵隊の部隊長が戦死？　そうか、なら今からお前が部隊長だ』

なんて言われて、部隊長にされてしまいました。本当にこの軍隊の適さには脱帽します。

さて、部隊長を任されたからには仕事をしなければなりません。まずは隊員の名前を覚える事から始めましょう。

といっても、随分減ってしまったので二十人ほどしか残っています。ん。

まず、一人目はみんなご存じ牛金さん。

そして、二人目は候成殿。

新兵隊の中で唯一の女の子で、茶色がかった髪のスレンダーな子です。

先ほどの黄巾との戦場で、僕が敵を何人も倒しながら味方を守っていたのを見ていたらしく。

『貴方のような人が隊長なら安心してついて行けます！』と言って、すぐに隊長と呼んでくれたいい子です。

ええっと、残りの方々は僕の包帯顔を怖がってまだ話していないの

で名前が分かりません。

これから徐々に仲良くなれるように頑張ります。

第8話（後書き）

ついに一刀君登場…名前だけ

第9話（前書き）

いつの間にやら 累計 62, 224PV 7, 564ユニーク
に。（。A。）

この小説をお読みになってくださった皆様に感謝。

第9話

数日後、洛陽に着いてすぐに新兵隊は正式に部隊として認められ、僕はその部隊長として任命された。

新兵隊改め羊枯隊の隊長になった初日の午前中、僕は二ヶ月ぶりに両親に会いに行った。

もちろん、家の少し前で誰にも見られないように包帯を取ってから。

「ただいま戻りました！、父上、母上」

そう言って店に入った僕を、両親は暖かく迎えてくれる。

「お帰りなさい信！

その様子だと、怪我はないようね」

「お帰り信！

戦に行く聞いて心配していたけど、無事に帰ってこれで良かったよ」

それから両親とこの二ヶ月で在ったことなどを話した。

僕からは遠征の話や、部隊長になったこと。

両親からは店の話や、近所での出来事などを話してくれた。

僕がいなくなったあと、賄賂を払えるか心配だったけど、どうやら僕が徴兵されたことにより少し賄賂の額が減ったらしい。

おかげで何とか払えているんだとか……。

「さて、それではそろそろ部隊のところに戻ります

午後からは訓練がありますので」

「そうかあ、部隊長も大変なんだね……しかし、信もすっかり軍人だねえ

ホントは、信にはこの店を継いで貰いたいんだけどなあ」

「あなた……大丈夫よ

きっとこれから平和になって信も兵隊をやめて、一緒にお店で働ける日がきますよ」

「そうですよ父上

必ずいつかは平和になりますよ……だからその時は……」

（この後戦乱の時代がくるけど、僕がこの二人を絶対に守ってみせる。

そして、平和になったら両親と一緒にお店で働きながら静かに暮らそう）

そんな事を考えながら僕は家の前で外した包帯を再び巻き付けていく。

その後、僕は両親に見送られながら自分の部隊のもとへと向かった。

城にもどると羊枯隊にも新しい兵が三十人ほど補充された事が伝えられ、羊枯隊は五十人ほどになっていました。

なので、兵の中でも実力のある牛金さんと候成ちゃんに副隊長をやって貰うことにしました。

そして、そのあとすぐに牛金さんと候成ちゃんとは真名を交換しました。

牛金さんの真名は尊^{そん}、候成殿は玲^{れい}というらしい。

それから数日後。

いつもの様に訓練を始めようと城へ行くと、陳留の太守曹操が黄巾党の首領張角を討ち取ったという知らせが洛陽に届いたことを聞いた。

今の朝廷は政を牛耳る宦官の十常侍と、軍部を握る何進たちの間で摩擦が起きている。

と言うことはもうすぐあの無ⁿ——じゃなくて、何進が殺されるころだろう。

そしてその後この洛陽に董卓軍が十常侍に呼ばれてやってくる。

史実の様な恐ろしい董卓が来るなら、命を賭けて洛陽に来るのを阻止するところだが。

この世界の董卓殿はなんとかわいい女の子！。

しかもゲームでは董卓殿が洛陽を治めるようになってから治安が回復し人々も活気を取り戻してたはず。

むしろ諸手を挙げて歓迎したいぐらいです。

そんな事を訓練に向かいながら考えていると尊（牛金）さんが慌てながらやってきた。

「尊（牛金）殿……どうしたんですか？ そんなに慌てて訓練まではまだ時間がありますよ？」

「しっ、信——！ きっ、聞いて驚くなよ！？」

（尊さん……慌て過ぎで隊長っ呼ぶのを忘れていますよ？）

いつもは公私を分けて僕を呼んでいるのに)

しかし尊さんはそのことに気付かず、話を進めました。

「いつ、今そこで聞いたんだが!! あ、あの無能!——じゃなかった、何大將軍様が殺されたらしい!!」

「——っ!!」

ついに十常侍が動き出した。

と言うことはこれからすぐに、何進が殺されたことを知った側近が十常侍を殺しに行くだろう。

それを知った十常侍の連中は正史道理に皇子二人を連れ出すに違いない。

そう思った僕は尊さんと一緒に羊枯隊のところへと急いだ。

隊のいる調練場へ着くとすでに皆集まっていて、急いでやってきた僕らに気付いた玲(候成)殿が慌てた様子で話し出した。

「隊長! 実は先ほど上から、帝が十常侍につれ攫われたとの報告がありました!!」

『すぐに隊を率いて帝の搜索にあたれ!』だそうです!」

どうやら考えていた通りに何進の側近は十常侍を探しているらしい。

「了解しました、と玲(候成)殿は上に伝えてください! 尊(牛金)殿はすぐに出撃する準備を急いでください!!」

全員準備が出来次第、帝の搜索に出ます!!」

「「「はっ!!」」」

その後、準備が調った僕たちは急いで帝と十常侍の搜索へ向かった。そして、洛陽を出てすぐに見つかった真新しい車輪の跡をたどり、ついに帝の乗った馬車を発見した。

しかし、その時はすでに董卓軍に皇子たちと十常侍が保護された後だった。

(……むっ？ 恋姫だと十常侍は生きてるんだっけ？)

その光景を見て十常侍が生きていることに疑問を覚えたが。

とりあえず、帝が董卓軍に保護されていることを上司に報告するため一度洛陽へと戻った。

それからすぐ後、洛陽に入った董卓軍は城へ入り、董卓殿は何進の代わりに大將軍となった。

どうやら十常侍の連中は以前から何進を殺害する計画を立てていたらしく。

何進が死んだ後の後ろ盾として、事前に董卓軍へ都へ来るように要請していたらしい。

と言うことは、要請受けた董卓軍が都へ来る途中で帝の馬車を発見して保護する事は、十常侍の筋書き道理なのだろう。

なぜなら、董卓軍という後ろ盾を得た十常侍は堂々と洛陽へと戻り

『我々は帝をお助けするためにつれて逃げた』

などといい、逆に何進の側近を悪へと仕立て上げて、数人の側近を処刑した。

そしてその後、何者かに弁皇子と何太后が暗殺される。
おそらくそれも十常侍によるものだろう。

さて何進の代わりに董卓殿が大將軍となったことにより、何進の部下はすべて董卓殿の指揮下に入る。
当然、何進の側近にアゴで使われていた我が羊枯隊もです。

しかし、何進の部下だった殆どの者は賄賂でその地位を得ていたので、大部分の者がその役職を追われた。
そのせいで將軍職に空きが出来、その下の者、大体十人ぐらいが繰り上がる事になったのですが……。

「さあー、さっさと掛かって来いやー！ そのけつたいな格好は飾りなんかあー！？」

「あー、いえ、これは飾りと言うか……まあ、確におかしな格好ですけど……」

なぜか目の前には張遼將軍が……。

なぜこんな事になったかと言うと。
件の通り、下の者が繰り上がる事になったのですが。
その繰り上がる候補となった者は、張遼將軍か華雄將軍と仕合する事になった。

なんでも

『これから貴方たちには現將軍たちと仕合して貰うわ。
その結果で將軍職にするかどうか決めるから頑張りなさい!』

なんて、軍師である賈馱殿が仰り、今現在の状況に。

この仕合は城内の広場で行われ、発案者である賈馱殿や部下の兵隊さん方もご覧になるそうです。

候補者である十人中、僕は一番最後でしたので前の方々の仕合を視ていたのですが……。

ブンッ!! ズドドン!!

「なんやあゝ? もう終わりがいな……次!」

(……………)

ただいま九人目が倒されたところです。

僕の前に連続で仕合をしているはずの張遼殿。

しかし、見た感じ疲れが溜まっている様には見えない。

試しに、《凝》でも視てたみましたがオーラも最初同様、綺麗なままでした。

とりあえず、呼ばれたので張遼殿の前へと出て礼をとる。

「羊枯隊、部隊長の羊 叔子です。

未熟者ゆえ、どうかお手柔らかに……」

「……おっおう! ……なんや……ケガでもしたんかいなあ?」

前の九人との試合中は、僕の事など目に入らなかったのか、前に出

て来た僕を見て少し驚いている。

「ええっ……と、その……昔、火傷を……（した”元”維新志士の人と同じ格好です）ボソッ」

嘘は言っていないせん。

最後の方は聞こえなかったかも知れませんが……。

「そっかあ、そら災難やったなあ」

少し気の毒そうな顔をしながらそう言った彼女。
そしてその後、すぐにその纏う空気を変えた。

「昔の火傷なら本気でやっても大丈夫やな
強さは感じへんけど、何となくアンタは前の奴らよりは出来そうや
なあ？」

せやから、アンタには遠慮無く行くで？」

「——っ!!」

そう言ったとたん、張遼殿の纏っていたオーラが膨れあがる。

尤もな事言ってますけど、本当は今までの九人で溜まったストレス
を僕で晴らすつもりなのかも知れません!。

「恨むんなら、アンタの前の奴らを恨みいや!」

「——っちい!!（やっぱいい!!）」

オーラが膨れあがるを視た僕は、日常的に抑えながら続けている《
纏》のオーラ量を素早く増やした。

それと同時に、いつも身につけている短剣を鞘から抜いて左手で持ち、その短剣を持った左手を突き出すように半身になって構えをとる。

左手の短剣は攻撃を捌く物で、主な攻撃は右手の拳打なのでこの構えになる。

「——っ!! ええなあ!!」

さっきまでのアンタは、強さの欠片も感じんかったけど
今なら分かるで、アンタの強さがな!!

……………さあ! 来いや!!」

どうやら、僕のオーラ量を本能で感じ取っているらしい。

(あんまり目立ちたくないんだけどなあ

そうだ……目立たないように素早く負けてしましましょう)

「そっちから来んのやったら、こっちから行くでえー!」

そう言って此方を睨む張遼殿、今も尚その全身に纏うオーラを少しずつ増やしている。

(あれ? ……まだオーラ量が増えてる!? しかも、なぜか《周

》で武器にオーラ纏わせてるし……)

父上、母上……。

今日が息子の命日になるかも知れません。

つくづく、この世界の女性が恐ろしくなった。

第9話（後書き）

関西弁難しい……。

第10話

さて、今まさに仕合が始まろうとしております。

眼前で構えている張遼殿はそれもう嬉しそうな笑顔で此方を見据えている。

「ほな、行くでええー!!」

「——っく!!」

そう言ったとたん、張遼殿はその手に持った長刀のような獲物——飛龍偃月刀——を上段から振り下ろして来た。

タダでさえ、業物の飛龍偃月刀を《周》で強化されたら、此方も《周》をしているとは言え、僕の持っている安物の短剣では受け止められない。

（普通の相手なら《周》だけで十分なんですけど——っ!）

張遼殿の迫力に命の危険を感じた僕は、〈ギア・アップ〉を発動させると同時に父上から教わった護剣術をここで使うことにした。

「てえええやああああ!!」

（速いっ!!）

——ブオォン!!

僕目掛けて勢いよく振り下ろされる鋭い刃に

（でも、今の状態なら——！！）

——カチンッ！

偃月刀の勢いで此方の短剣が折れないよう、触れるように刃と接触させて

（剣上を滑らせるように、その勢いのままで）

——シャオオン！

まるで、斬撃がそこを通ると決まっていたかの様に

（軌道を書き換える！！）

——ビュオオンッ！！

その斬撃は僕に当たることなく宙を斬る！！

「——なっ！！」

張遼殿が、目の前で起こった現象に、僕が使った剣技に驚きの声を出している。

これが昔父上から教えてもらい、それからずっと父上との修行で繰り返し練習して習得した護剣術。

（届かざる左手の護剣　ーマン・ゴーシューー！！）

しかし、驚いて居たのは一瞬で、その後も張遼殿はその得物を当てようと続けざまに僕へ斬り込んでくる。

――ブオオン！　カチッ！　――シャオン！

上から

――ギュオン！！　カチンッ！　――シャオオン！

左から

――ブウオン！！　カキンッ！　――シャヤオオン！

右から

――ブオオオン！！　ガチンッ！　――シャヤヤオオン
正面から。

そのすべての斬撃を軌道を、相手との距離を一定に保ちながら、武器の振るわれるタイミングを計りながら左手に持った短剣で書き換え続ける。

S I D E　賈馱

この十人目の仕合前まで、ボクの心は沈んでいた。
ボクがあらかじめ思っていた以上に、兵の質が悪かったからだ。

この洛陽で軍の上職に就いていた奴らは、賄賂によってその地位を得たものばかり。

その下の兵士も賄賂が払えなかった代わりに無理矢理連れてこられた街民。

とでもじゃないけど、戦なんかに出せるようなものじゃなかった。

けれども、私たち西涼軍だけでは周辺に散らばった黄巾の残党を片付けるには人手が足りない。

そこで、少しでも使える人材を見つけようとこの仕合を開いたのだけれど……。

今まで視てきた候補者の九人は、將軍として使える様な人材は居なかった。

そしてついに最後の一人になり、最後の候補者が現れた。

そいつは、鎧から出ている肌すべてに、包帯を巻き付けたおかしなやつだった。

ボクは『どうせこいつも見た目だけで、前の九人と同じね』と諦めていた。

しかし、その考えはいい意味で裏切られることとなった。

今日の前で十人目の仕合が行われている。

しかし、それは今までボクが視てきた九人と同じ様な仕合ではなかった。

まるで踊るかの様な綺麗な動きで打ち合う二人は、宮廷で観る舞踏みせう

と間違えるかの様な……、いや、宮廷で見るそれよりも美しかった。
ボクはもちろん、その戦いを観ている回りの兵たちも、その仕合を見逃さないように、瞬きをするのも忘れて見惚れた。
霞と包帯の男？の刃が奏でる、その透き通った独特の残響音も二人を彩る舞曲となっている。

——ブオオン！ カチツ！ ——シャオン！

——ギウウン！ チャキツ！ ——シャヤオオン！

そして尚も続く二人の舞はさらに烈しくなっていく。
五十……いや、それ以上続けて打ち合った二人はついにその動きを止め、男が後ろへ下がり距離をとる。

烈しく打ち込んでいた霞は肩で息をして疲れが見えているのに対し。
包帯の男はその呼吸を乱すことなく、短剣を構えたまま霞を見つめている。

「……………凄い」

ボクの口から思わず声がこぼれた。

S I D E O U T

張遼殿からの斬撃が終わり、その隙に僕は距離をとるため後ろへ下

がる。

「……………凄い」

強化した聴力が誰かの呟いた声を拾う。

しかし、僕はその声の主を捜すこと無く張遼殿を見据える。

彼女は続けて武器を振るったせいか額には少量の汗が見え、息を乱しながら肩で呼吸をしている。

しかし、僕は最低限の力で彼女の攻撃を捌いていただけなので疲れはない。

そのことを彼女も分かっているのだろう。

どうやら次の一撃で決着を付けるべく、殺気と共にオーラを増幅させる。

（あれ？ 仕合じゃなかったけ？ これじゃ死合い……………）

と今の現状に気づいたところで賈馱殿から声が掛かる。

「そこまで！！ 双方武器を引きなさい！」

その声を聞いた僕はホッとしながら、しかし張遼殿はどこか残念そうにしながら闘気を霧散させる。

（ふう……………一時はこのまま死んでしまうかと思ったけど、どうにかなって良かった……………ん？）

あれ？ 負けようとしていたはずなのに、なぜこんな事に？）

「むうゝ、賈馱っちのいけずゝ」

最初は目立たないように負けようと思っていたのに、なぜこんな事になったのかと考えていると、賈馱殿が話しかけてきた。

「あなた……たしか羊枯隊の部隊長だったわよね？」

「あ……はい」

「貴方にはこれから將軍として働いて貰うわ
あとでほかの将とも顔会わせをするから、少ししたらまた城に来て
頂戴」

「はっ……はっ！ 了解しました！！」

どうやら、將軍になることは決定してしまったらしい。
という事は、僕はこの後の反董卓連合では将として出陣ですか……
そうですか……。

「じゃ、ボクたちは準備のために一足先に行くわ
……またあとで会いましょう」

「羊枯っち、また後で仕合おうてな？ 約束やでー？」

そう言い残して、賈馱殿と張遼殿は城へと戻っていった。

《絶》で逃げたくなった。

第11話（前書き）

キャラの台詞がやっぱり難しい。

翻訳機みたいに、文を打ち込んだらキャラの話し方に変換してくれる……そんなソフトがほしい。

第11話

はい、どうも。

無事に董卓軍で將軍の地位を得て、部隊人数がいきなり500人に増えてしまいました。

まあ、これでもまだ將軍職を任されたばかりなので、ほかの方々と比べたら少ないのですが。

それに兵に命令を伝えるのは僕じゃなくて、副隊長の二人ですからね。

そう言えば、將軍になったことで服装が自由になりました。

董卓軍の將軍さんたちを見ればわかりますね、みんな鎧なんて着けてないですし。（あれ？ でも確か華雄殿は？？）

包帯も折角、志○雄さんの様にしたので服装もあの紫の着流しに替えましょう。

これでもう長い黒髪が後ろから出ている以外は志○雄さんです。ちなみに、髪は腰まであるので毛先の方をリボンの様な布で巻いて纏めてあります。

そんな感じで服装を変えて、しばらくの間は部隊の調練などをして過ごしたり。

時折、華雄殿や張遼殿と仕合をしたりして比較的平和？に過ごすことが出来ました。

しかし、その平和も城に届いた一つの知らせによって終わりを迎えます。

なぜなら、袁紹によって出された檄文により、ついに周辺諸侯たちによって”反董卓連合”が組まれたからです。

今はまだ、盟主である袁紹とその一門の袁術、その二家周辺の小諸侯のみですが、これから次々に増えることでしょう。

その集まってくる諸侯の殆どは、中枢の権力を握った董卓様への妬みが理由でしょう。

それ以外の諸侯は、この間、董卓様の命で行われた官の大粛正が理由だと思われます。

この官の大粛正は、洛陽で不正を働いていた文官を処罰しただけなのです。

しかし、これを快く思わない十常侍が、商人などを使って悪い噂を流させているらしいです。

まあ、その粛正された文官の上司は十常侍ですからね。

このままでは自分の身分が危ういと思っていますのでしょう。

さて、知らせが届いた城ではすぐに軍議が開かれることにしました。軍議の場には董卓軍の主立った将が集まっています。

僕の目の前にある玉座には、我らが主である董卓様と、董卓軍の筆頭軍師である賈馮殿。

そして僕の少し前に、呂布殿、陳宮殿、張遼殿、華雄殿がおり、今まさに軍議が始まろうとしています。

「みなさん……、今回の急な招集に応じて頂きありがとうございます」

董卓様から労いの言葉を頂く。

「今回、みんなに集まって貰ったのは先ほど届いた知らせについて話し合うためよ

みんなもう知っているでしょうけど、これからボクたちの事を快く思っていない諸侯連中が攻めてくるわ

それで…みんなには、これからどうするべきか意見を聞きたいの」

そう言う賈馱殿の顔からは事の深刻さが伺える。

まあ、ゲームでは董卓様に権力の中枢を握られたことへの腹いせだと曹操さんが言っていましたけど……。

そんな理由で戦を起こすとか袁紹はバカなんでしょうか？ ……あつ、バカでしたね。

「もちろん迎え撃つべきだ！！ 我らが出れば奴らなど有象無象に過ぎん！！」

「せやなあー、まあ、恋や華雄がいれば大丈夫やと思うけどな」

「……………月、イジメるヤツ、倒す」

「恋殿の武勇！ 奴らめに見せてやりましょうぞ！！」

どうやら皆さん賛成の様で、いつもはのんびりしている呂布殿もやる気を出してます。

確かに僕も賛成ですが、僕らが迎え撃つのにここを出たら十常侍が何をするか……。

その辺の事を賈馱殿に聞いてみますか。

「僕も迎え撃つのに異論は在りませんが、僕たちがここを離れたら十常侍がなにをするかわかりませんよ？」

今ごろ奴らは董卓様を生け贄にして、この戦を生き延びようと考え

ているはず。

現在は誰かしら将がついて董卓様を守っていますが、僕らが出てしまったらどうするのでしょうか。

「確かにあのジジイどもが、ウチらが出払った後大人しゅうしとるわけ無いわな」

「なら、我ら将の中から一人が、今までどおり月様に付いていれば良いだろう

それなら十常侍どもも手出し出来まい」

「ですが、ただでさえ此方は兵が少ないのですぞ？
将を護衛にまわすと、動かせる部隊が減り守りが疎かになるのです」

「十常侍のことならボクが何とかするわ
絶対に月を奴らに渡したりなんかしない！」

「そう…ですか
賈馱殿がそこまで言ってくれるなら安心ですね」

すべてのルートで董卓様を守り通した賈馱殿が言うんです。
この世界の彼女もきつと董卓様を守りきるでしょう。

「そういえば…羊枯、貴方に真名を預けて無かったね
十常侍との事で忙しくて預けるのを忘れてたわ
遅くなって悪いけど、貴方に真名を預けるわ
私の真名は詠よ、よろしくね」

（そう言えば、まだ真名を交換してなかったですね）

皆さんとはこの数日で結構仲良くなれたのに真名交換の事をすっかり失念していました。

それを見たほかの方々も、僕と真名を交換していないことに気づいたようです。

「羊？さん、私の真名も受け取ってください
私の真名は月と申します」

「そう言えば、まだ交換してへんかったなあ
ウチの真名は霞や、よろしゅうな」

「……………恋」

「恋殿が預けるのなら、ねねも真名を預けますぞ！
ねねの真名は音々音ですぞ」

「お前ほどの武人なら預けてもいいだろう
私の真名は藍だ」

將軍の方々が次々に真名を預けてくれる。

というか……華雄殿、真名あったんですね。

ゲームだと記載が無かったんで、無いのかと思ってました、すいません。

（※華雄の真名は作者が勝手に作りました）

「皆さんありがとうございます、僕の真名は信といいます

真名を預けられたからには、此方も見せなくてはなりませんね……」

そう言うと、僕は顔の包帯を外しだす。

おー、みんな驚いていますね。

たしか尊さんや玲さんにも見せた時は同じような反応でしたね。きっとこの包帯の下の顔は酷い火傷だと思っていたけれど、火傷など無い事に驚いているのでしょうか。

あの時は二人ともフリーズして触れても反応が無かったので、逆に僕が驚いちゃいましたよ。

そう言えば、あれから数日の間二人が僕を見ると『勿体ない』とか呟いてましたね。

今はもう言わなくなりましたけど。

「隠していて、すみませんでした

騙すつもりは無かったんですが、実は僕——」

『火傷なんてして無かったんです』って続けようとしたら、突然彼女たちが

「「「「女「性だったんですか!?!」「だったの!?!」「やったんか!?!」「……!」「ですぞ!」「か!?!」「」「」「」

(なん……だと?)

順番に、月様、詠殿、霞殿、恋殿、ねね殿、藍殿がそんな事を言いだした。

「ハ……ハハハハハ、ナニイッテルンデスカ? ドツカラ、ドウミテモ、オトコデショウ?」

「「「「「………(イヤ、女顔「ですよ?」「よね?」「やで?」「……」「ですぞ?」「だぞ?」)」「」「」「」

おっといけない、あまりのショックで片言になってしまいました。

その後、皆さんから冗談だと言われ、僕はショック状態から何とか気を持ち直した。

あの時の目は本気の目だったが、みんなが冗談だと言うなら冗談なのだろう。

たとえその口で冗談だと言いながら、目を泳がせていても……ね。

そして、その時の六人が思っていたことは。

「「「「………」（（（（こんなにかわいい顔してるのにいつも顔に包帯巻いてるなんて……勿体ない））））」「」「」

冗談だと口では言いながら、そんな事を思う五人と。

「……………（…………お腹減った）」

お腹が空いてしまった、
腹ぺこ飛將軍が一人。

第11話（後書き）

PSPの恋姫買ったんで、これから更新遅くなります。

第12話（前書き）

第6話の最後を少し修正しました。

第12話

その後、恋殿のお腹の音を合図に会議が終わり、皆さんが広間をあとにする中、僕は決戦前の休暇を貰うため、賈馱殿に話しかけた。

「賈馱殿、すいませんが少しよろしいでしょうか？」

「なに？ どうしたの信？」

「いえ、この先忙しくなると両親とゆっくり話す時間が取れないので、今日の午後は暇を貰ってもよろしいでしょうか？」

「そうね……わかったわ

みんなにはボクから言っておくわ」

「ありがとうございます賈馱殿

それでは、用件はそれだけですので失礼いたします」

「ええ、貴方には政務も手伝って貰ってるし、今日ぐらいはご両親とゆっくりしてきなさい」

まあ、別に会うだけなら暇を貰わなくてもいいんですけどね。將軍になってからは城の出入りは比較的自由になりましたし。

（許可も貰えた事ですし、両親に会いに行きましょう
そういえば、董卓軍が洛陽に来てから賄賂を請求されることも無くなったと聞きましたね
ということはお店も繁盛していますかねえ？）

僕はそんな事を考えながら城をあとにする。

今の時間お店は忙しいので、お客さんが減る時間に行くためにゆっくり移動し、もちろん途中の路地裏で《絶》をしながら包帯を取り、志○雄さんの様に着崩していた服を正すのも忘れない。

そうして、久しぶりに自宅で寝むれると思いいながら帰ったのですが……。

「もぐもぐ……むぐむぐ……」

「……………」

「あら？ 信、お帰りなさい！」

「おや？ 信、帰って来てたかい？」

父上と母上が僕に気づき声をかけてくる。

すぐに両親のいる方へ顔を向けて返事を使用としますが、口の中いっぱいに食べ物詰め込んで一心不乱に食事をする恋殿から目を離す事が出来ない僕は、客席に目を向けたまま返事を返す。とりえず、両親に返事をしなくてわ。

「あっはい、ただいまです、父上、母上。」

今日の午後の間だけ暇を貰ったので帰って来たんですけど……ええっと、この方は……」

「この子？ さっきお店の前でお腹を空かせて倒れていたのよ？」

「一緒にいたお友達とはぐれてしまったらしいんだけど……知り合いかい？」

「まぐまぐっ……もきゅもきゅ」

「ええ……まあ（あんな……リスみたいにホッペをふくらませて……かわいい……癒される）」

「……………はっ!! おっといけません。

恋殿が愛らしすぎて、思わず女性の食事姿をガン見してしまいました。

「なら、一緒にお友達を捜してあげなよ
僕たちとの話はその後でも出来るし」

「そうしてあげなさい信、はぐれちゃったお友達もこの子を探してるでしょうし」

という事で、恋殿がはぐれてしまった友達と一緒に捜すことに。
とりあえず恋殿に誰とはぐれたのか聞いてみましょう。
まあ、おそらくねね殿なのでしょうけど。

「あのー、恋殿〜?」

「はむはむっ……………?」

「（——っぐう!!）はっ、はぐれてしまった友達とは、ねね殿ですか?」

「もきゅもきゅっ……………（コクッ）」

どうやら、ねね殿であっているらしい。

危うく会話の途中で意識が飛びかけました……さすがは天下に謳わ

れる飛將軍ですね。

まさか両手で肉まんを持ち、それを食べながら小首を傾げるとは……。

さて、大変名残惜しいですがそろそろ探しに出かけましょう。

「でっ、では、ねね殿を探しに行きましょう

きつとねね殿も恋殿を心配して探しておられるでしょうし」

「もきゅっ……ごっくん………（コクッ）」

恋殿もねね殿が心配なのか、食事をやめて頷いてくれます。

おかげで抱きつきたい衝動も収まりました。

「それでは、少し出て来ますね、父上、母上」

そう言って僕は恋殿と店を出て、ねね殿を探すため恋殿がはぐれた場所へ向かいます。

「……………」

「なるほど、確かにここは人が多いですね」

そう、ここは洛陽で一番大きな通りで、昼を過ぎたばかりの今は大いに賑わっています。

これだけの人の中からねね殿を探し出すのは難しいでしょう………
普通の方法なのですが。

（とりあえず、《凝》で探してみますか）

そう、《凝》で探します。

実は顔会わせの時に將軍全員を《纏》で視て、將軍の方はもちろんのこと軍師の詠殿やねね殿、そしてあのとても戦えそうに見えない月様も《纏》をしている事が分かりました。

彼女たちが実年齢よりも若く見えるのは、《纏》でオーラを纏って若さを保ってるのかもしれませんが。

なので、この人混みの中で《纏》をしている人がねね殿のはずです。

(ええつと……………おお?)

かなり遠くに《纏》をしている人を発見し、すぐに視力を強化してその人物を見る。

すると、不安な顔をしているねね殿と二匹の犬——おそらく赤兎と張々——を確認することが出来ました。

「恋殿、ねね殿を見つけました、此方です、ついて来てください」

「……………! (コクツ)」

そう言って僕は、はぐれない様に恋殿の手を取る。

その時、恋殿の顔が少しだけ紅くなった様に見えました。

もしかしたら、急に手を握られて怒っているのかも知れません。

しかし僕は、これ以上ねね殿を心配させないため、恋殿に心の中で謝りながら彼女の手を引いて人混みの中を進む。

しばらく進むとねね殿の声が聞こえてきます。

「——れ——ど——、——ん——殿——!——、恋殿おー、何処におられるのですかあー?」

どうやら、今まで必死に探していたらしいです。

ねね殿はその小さい体から、少しでも大きな声を出そうと口に手を

添え、必死に恋殿の名を呼んでいます。

「……………ねね、恋、ここ」

「————っ!!　　れっ、恋殿おっ!!」

恋殿に気がついたねね殿とは、急いで駆け寄り恋殿に抱きつきました。

それに続いて赤兎と張々も近寄ってきます。

「恋殿おっ、ねねはっ!……………ねねは心配いたしましたぞおっ!!」

ねね殿にそう言われながら抱きつかれる恋殿は、シュンツとした顔で申し訳なさそうにしています。

「ところで恋殿お……………此方の方はどなたですかあ?」

そう恋殿に尋ねるねね殿は、此方に視線を向けている。
どうやら、僕が誰だか分からないらしい……………。

(まあ包帯してないですし、素顔も一度しか見せて無いので仕方ないですね)

ちょっとショック。

「ねねも知ってる……………」

「そう言えば、先ほど見たような……………っ!!　　信殿!?!」

おお!、気づいていただけたようです。

「ええ、どうもです、ねね殿
やはりいつもの包帯姿が印象に残ってて、すぐには分かりませんよ
ね」

どうやら包帯効果は絶大のようです。

この様子なら、僕の素顔を知らない人に包帯を取った後を見られても分かる人はほとんどいないでしょう。

《絶》も使えばもう完璧ですね！！

「信…………ねね探すの、手伝ってくれた」

「そうだったのですか

信殿、ご助力、助かりましたですぞ！」

「…………たすかった」

「わんわん！」「ワンワン！」

「いえいえ、お力になれて良かったです」

そして、二人と二匹にお礼を言われた僕はそろそろ家に戻る事にした。

「では僕は自宅に戻りますので、これで失礼します」

「ん…………分かった、バイバイ」

「信殿！　また明日なのですぞ！」

そう言った僕を二人は見送ってくれる。

「ええ、また明日」

こうして僕は家に帰り、両親に事の次第を述べたのだが……。

「そうかい、それは良かった……あ、信
彼女の食事代なんだけど」

「—————あ？　じゃなくて、え？」

話終わった途端、恋殿の食事代を請求されました。

結果、僕の懐から二ヶ月分の給金が父上のもとへ旅立って行きました。

第12話（後書き）

恋のかわいさを表現仕切れない自分が憎い……。。

第13話（前書き）

これで、小説のストックが全部無くなりました。

第13話

ついに諸侯が動き出すという情報が入ってきたらしい。

場所は洛陽の東、虎牢関を抜けた先にある？水関の近くに向かって
いるらしいです。

まだ規模は大きくはありませんが、しばらくすれば他の諸侯たちも
続々と集まるでしょう。

そう言えば、物語でも東から攻めて来ていたんでしたっけ。

いやあ、いくら記憶の保護が在るからと言っても、切欠が無いと思
い出せませんね。

忘れはしないんですけど、この十数年の記憶に埋もれてしまっと思
い出し難くなってます。

最近では、『そう言えばそうでしたね』と何かが起こった後にしか
思い出せ無い様になってきました。

つと……話がそれてしまいましたね、話を戻しましょう。

諸侯が集まり始めたという情報が入ったことにより、僕たち将は連
絡を受けて城へ集まる事に。

どうやら、迎撃をするにあたって軍議を開くようですね。

なので僕はいつもの様に広間へ向かいます。

そして、軍議が無事に始まったのですが……。

「だから！ 私が征くと言っているだろう！」

「藍（華雄）が征ったら時間稼ぎにならんやろ！ 我慢出来ずに突
っ込んで自滅するんが落ちや！」

現在、藍（華雄）殿と霞（張遼）殿が言い合っているのは、誰が？
水関に入るかと言うことです。

事の発端は我らが軍師、詠（賈馮）殿の

『敵が東から来るなら、名声を得るために虎牢関と？水関を攻める
はず

今回の戦いは、遠征軍である奴らの弱点、兵糧が尽きるのを待つわ
だから、あなた達には関に入ってもらって時間稼ぎをしてもらいた
いの』

という発言を聞いた藍殿が『？水関には私が入る』と言い出したの
を霞殿が反対しているという状況。

その後も二人はしばらく言い合っていました。ついに先ほどから
考え込んでいた詠殿がついに口を開きました。

「なら、？水関には藍の部隊と信の部隊に入ってもらわ
けれどあくまで時間稼ぎだからね、無茶しないでよ？」

「おう！ 任せておけ！」

「了解しました」

「……………まあ、信がおるんなら大丈夫やろ」

と言うことで？水関は藍殿と僕に決まりました。

どうやら僕の仕事は藍殿のストッパーみたいですわね。

「他の三人には、？水関で防ぎきれなかった時のために虎牢関に入
ってもらわ

三人と言っても、ねねは恋の軍師で部隊を持ってないし、実質二部隊ね

それに、？水関から退いた二人の部隊も合流して四部隊でさらに時間を稼いで頂戴」

そう言った詠殿の言葉に、三人が頷く。

すると、今まで俯いていた月様が口を開きました。

「皆さん、私のせいでこんな事になってしまって申し訳ありません私が張讓さんの要請に応えて洛陽にはいつてしまったばかりに……」

「月は悪くないわ

もとはといえば、ボクがもっと良く考えていれば、こんな権力争いに巻き込まれることは無かったんだから……」

「月や詠のせいやないで、悪いんは十常侍の奴らや」

「たしかにそうだな

月様の優しさを利用し、卑劣にも裏切った奴らは許せん！」

「月も詠も、悪くない……」

「恋殿の言うとおりに出すぞ！

もし十常侍の企みに気づけたとしても、奴らは別の方法を用いて来たはずです！」

先ほどまで悲しそうな表情だった月様と詠殿。

しかし二人は、みんなの声を聞くにつれて徐々に元気を取り戻していきます。

「そうですよ月様、詠殿

それに、月様たちが来てくれたおかげで、僕たち洛陽の民は救われました

官の不正を正して頂いたおかげで賄賂を要求されることも無くなり、民は皆、月様たち西涼の方々に感謝していますよ」

「ありがとうございます、皆さん……」

「そうね、それを聞いて少し楽になったわ
ありがとね、みんな」

そう言う二人の顔は、いつもの表情へと戻ってしまいた。
どうやら、思っていた以上にお二人は責任を感じている様ですね。
連合には少し痛い目にあってもらいましょうか。

さて、割り振りも決まりましたし、時間ありませんので部隊を率
いて急いで向かいましょう。

そうして僕と藍殿の部隊は、洛陽から出て東へ向かいます。
途中、虎牢関やその他の小さい関をいくつか通り、ようやくその先
の？水関へとたどり着く。

ちなみに。

ここに来るまでに通った関はすべて、洛陽までの一本道が両脇を崖
に挟まれている事を利用して造られた関で、防衛に適した立地にな
っています。

当然、この？水関もとても防衛に適した造りになっており、その姿
はまるでダムの様です。

情報によると連合軍はここから少し離れたところに陣を張っている
そうです。

連合軍がここに到着するまでに、急いで防衛準備を始めます。

.....。

.....。

.....。

.....。

...

？水関に入ってから数日が絶ちました。

予想では防衛の準備が終わる前に連合が来るはずだったのですけど
.....まだ見えません。

斥候の話だと、今現在も軍議をしているらしいです。

（あー、そう言えば.....）

その報告を聞いて思い出しました。

確か総大将を決める軍議では、諸侯たちの腹の探り合いで長引くの
でしたっけ。

（そんな悠長にしてて良いのでしょうか？ こちらとしては助かり
ます）

しかし、それももうすぐ終わるでしょう。

先ほどの斥候から、曹操軍の旗が連合に加わったとも聞いています
しね。

今頃は、此方に向けて進軍している頃でしょうか.....。

SIDE 一刀

俺たちが到着してすぐに軍議？　が終わり、俺たちは今度こそ都へ向けての行軍を始めている。

「？水関の先鋒は公孫賛と劉備ですか……」

軍議から戻り、秋蘭から内容を聞いた桂花がそう声をもらす。

「ええ

連合の初戦、我らで引き受けた方が良かったかしら？」

「いえ、？水関の将は華雄、それと最近将になったばかりの羊枯という者の二人です

華雄の方はそれほど強い相手ではありませんが……」

途中で言葉を止めた桂花を促すように、華琳が言葉を紡ぐ。

「羊枯という将がどうかしたの？

最近将になったのなら、別段警戒することは無いのではなくて？」

「実は、華林様より調べるよう命じられていた包帯姿の兵士がその羊枯という者らしいのです」

「っ！　そう……

その羊枯という将の詳しい情報は？」

包帯の兵士という単語を聞いた途端、華琳は嬉しそうな笑みを浮かべた。

どうやら、この時代にはすでに羊枯が将として存在しているらしい。この世界で将になっていると言うことは、羊？も女の子かもしれない。

「それが、得られた情報はあまり多く在りません

なにぶん将になったばかりなので、正確な用兵の実力も分かっておらず、噂程度のもののしか調べる事はできませんでした」

「噂でもかまわないわ、報告して頂戴」

「はっ！！　では、報告します

間諜によりますと、羊？は昔酷い火傷を負ったらしく、いつも包帯を全身に纏っている男だそうです

そして、武の方は張遼と一騎打ちをして引き分けるほどの実力というくらいです」

どうやら、この世界の羊枯は男だったみたいだ。

やっぱりすべての有名武将が女の子な訳じゃないらしい。

しかし、何故華琳はその将を気にしているのだろうか。

さっきの軍議で名前が出たときには気にしていなかったのに。

「なあ華琳、その羊枯って将をさっき軍議でも聞いて知っていたのに、何で今頃気になったんだ？」

「一刀、あなたも風からの報告で聞いているはずよ

黄巾討伐で官軍を助けたとき、捕まえた捕虜が言っていた話を」

「風からの報告？ ええっと、あるとき黄巾軍は恐慌状態だったんだよね？」

確か原因は、包帯を巻いた——っ！！」

そうだった。

確かに風が、黄巾軍は包帯姿の兵士に手を向けられた途端動けなくなったと俺に報告していた。
ってことはもしかして。

「その時の兵士が、今は将になっているのか？」

「おそらくはそうなのでしょう」

全身が包帯姿の人間など、そう何人もいるものではないわ

この短期間で、ただの一般兵から一軍の将にまでなるなんて……やはりその才、手に入れたいわね」

そう俺に言った時の華琳は、流琉や季衣を見付けたときの様な笑顔だった。

S I D E O U T

？水関の上から視力を強化する事でようやく見える距離に砂塵が見える。

回りにいる部下の目で確認できるまで、あと数刻と言ったところでしようか。

「さて、僕がここにいて未来はどう変わるのでしょうか……」

出来ることなら、良い方向へと変わってほしいですね。

これ以上……僕らの優しい主が悲しむ事の無い未来へと……。

第13話（後書き）

短いすかね？

一応3000文字を目安に書いているんですけど……。

第14話（前書き）

会話を多くする様に頑張りました。

第14話

ついに連合が？水関の前に直陣した。

僕と藍殿は今、その様子を関の上から見下ろしてる。

ここから見えるその光景は、まるで映画のCGです。

「まるでCGですね……」

「む？ 信、”しいーじいー”とはなんだ？」

僕の呟きを聞いた藍（華雄）殿が僕に質問してきます。

どうやら考えが口から漏れてしまったようです。

やはりそう言う単語は使われていないようですね、とりあえず誤魔化しましょう。

「えっ……、そっ、それよりも藍殿！ これからどうするのです？
まあ、良将にして猛将と謳われた華雄將軍にかかれば連合軍など恐るるに足りないと思います」

「む！？ ふふんっ、そうだな

所詮奴らがいくら集まろうと、猛将と謳われた私の敵ではない」

そう誤魔化した僕に、藍殿は自慢する子供のように胸を張って言葉を返す。

「誤魔化したな」「誤魔化しましたね」

後ろで、僕の副官二人がなにか言ってるが聞こえません。

僕たちがそんな会話をしていると、連合軍からの先陣が進軍を開始したようです。

「藍殿、連合の先陣が動き出したようですよ？」

「ふむ……、しかし小勢のようだな

……将は誰だ？」

「旗は”劉”の文字ですね

おそらく、平原から来た劉備軍ですね

先頭を進んでいる黒髪の将は、その劉備の配下の関羽將軍でしょう」

「劉備か……私は聞いたことが無いのだが、信は知っているのか？」

「ええ、まあ、戦とは情報が大切ですからね

連合の事は大体調べてありますよ」

「なるほど、そうなのか」

そう頷く藍殿は、先ほどからずっと連合の先陣を見つめている。

その次の瞬間、藍殿は急に号令をだす。

「全軍、出撃準備！ 先陣の劉備なるものを粉碎し、敵軍中央にそびえる袁家の牙門旗を落とすぞ！」

「ちよっ！！ 藍殿、命令を忘れたんですか！？ 足止めして時間を稼ぐんですよ！？」

「何を言う信！ 良将にして猛将と謳われる私が出れば、足止めなどと言わずに追い返してくれるわ！！」

いきなり関から出ようとする藍殿を止めるため、僕は慌てて彼女の前に回り込む。

どうやら先ほど持ち上げたせいでいつも以上にやる気になってしまったようです。

「しかし、命令は足止めですよ!？」

「ならお前はここで、私が奴らを倒すところを見ているがいい……華雄隊！ 出るぞ!!」

「「「はっ!!」」」

そう言って藍殿は僕を押しつけて、部下と共に関から出てしまう。こうなってしまうては、もはやここでの足止めは無理でしょう。なら、今僕がすべきことは……。

「つく！ 誰かある!!」

「「はっ!!」」

僕の声に副官の二人が返事をする。

「今から羊枯隊を半分に分けます！

半分は玲殿と共に、僕と華雄隊の救出へ！ もう半分为尊（牛金）殿に任せ、関からの撤退準備をお願いします！」

「「了解!!」」

すると二人は迅速に準備を終えて、玲殿に率いられた半分の部隊が、

僕の前に到着する。

「隊長！ 準備が完了しました」

「玲さん、ありがとうございます」

玲さんにお礼を済ませ、僕は眼前に列ぶ自分の部隊へと号令をだす。

「羊枯隊の精鋭よ！ 我隊はこれより、華雄隊の救出へと向かいます！！」

救出後はこの関を棄て虎牢関まで退きますので、皆さん最後まで生きてついて来てください！！」

「「「応っ！！」」」

その後、僕と玲さんは部隊を率いて関の門をくぐる。

関の門から出ると、華雄隊はすでに劉備軍により連合の中央へ誘い込まれた後。

「これより、もう一度部隊を半分に分けます！！
半分はここに残り、退路を確保しておいてください！」

ここまで関から離されていると、敵に回り込まれた場合退路が無くなってしまうので半分を残す。

（これで羊枯隊は四分の一の部隊員で華雄隊を救出しなければなりませんね）

隊を分けて、急いで華雄隊のもとへと向かいます。

しかし、僕たちが近づくと同時に、鋒矢陣の華雄隊の横から曹操軍

が横やりを入れる。

すると華雄隊は、瞬く間に陣形を崩してしまう。鋒矢陣を崩された華雄隊は、その突貫力をそがれて連合軍に挟まれてしまう。

僕らが華雄隊の最後尾にたどり着く頃には、すでに乱戦状態になっていた。

「僕は先頭にいるはずの華雄將軍を捜します！」

候成殿と数名は僕について来てください！」

あとの皆さんは華雄隊を援護しつつ、負傷した兵から先に下がらせてください！」

「了解です、隊長！」 「「はっ！！」」

指示を済ませて、僕は藍殿を連れ戻すために血臭と金属音が飛び交う乱戦の中を進む。

襲いかかる敵をあしらいつつ進むと、一騎打ちをしてる藍殿をようやく見付ける。

藍殿は黒髪の将——おそらく関羽將軍——と打ち合う姿は確かに猛将と呼べるものだ。

しかし、次第に押されて防戦一方になり、ついに武器を飛ばされてしまう。

その隙を突いて、相手は藍殿にとどめを刺そうと武器を振りかぶった。

（まずいっ！！）

以前の黄巾の時のように武器を投擲しても、関羽殿の様な猛将相手では、六割の鉄甲作用強化じゃ弾かれて終わり。

ならばと思い牙突の構えを取る。

「華雄っ！ 覚悟！！」

ブォォォン！！

「——っぐ！！」

そう言って藍殿へと振り下ろされる刃へ向かって、僕は地面を蹴った。

S I D E 華雄

「華雄っ！ 覚悟！！」

ブォォォン！！

「——っぐ！！」

自分の武に絶対の自信を持っていた私は、連合の将ごとくに負けるなど思っていなかった。

しかし、実際に戦って自分の未熟さを思い知った。

私のせいで散ってしまった部下に詫びながら、その時私は死を覚悟した。

ガギィィィン！！

しかし、私の命を刈り取るはずだった刃は一人の将によって払われる。

「つぐ!! 新手か!？」

「華雄將軍! ここは僕に任せて、部隊と共に今すぐ退いてください!!」

その将は、信だった。

どうやら私を退かせるために、この戦場の最前線まで来てくれたらしい。

だが、ここに信を残して行くわけには……。

「いつ、いや、だが!!」

「させるか!! ハアッ……!!」

ブォン!!

「つく! 玲殿!! 將軍を連れて退いてください!! 後で必ず追いつきます!!」

「了解です!! 隊長!!」

先ほど関羽と名乗っていた将の攻撃を避けながら、信は自分の副官へ私を連れて退くように指示を出す。

返事を返した副官は、すぐさま私を馬に乗せて信から離れて行く。

「離せ!! このままでは信が殺される!! 信を見殺しにするの

か!？」

そう、信は今まで私や霞と何度か仕合をしてる。

しかし、奴は今まで私たちと引き分けるだけで、勝ったことはない。私が負けた相手に奴が勝てるはずが……。

「將軍、隊長は大丈夫ですよ」

「なぜそう言いきれる!!」

私の不安をよそに、副官の女は自信に満ちた声で答える。

「確かに、隊長が将との一騎打ちで勝ったところは私も見たことが在りません

しかし……負けたところも見ることがないんです」

「——っ!!」

たしかに、奴は私と霞の二人と続けて戦ったときも負けていない。それに、奴は今まで攻撃を仕掛けて来たことはない。

引き分けの理由も、奴の武器が攻撃を捌き続けたことによる疲労で壊れたからと言うものだ。

ならば、奴は本気では無かったのか!？」

「いえ、おそらく隊長は本気でしたよ」

考えが顔に出ていたのだろうか、私の顔を見た副官はそう答えた。

「だが、攻撃をしなかっただけかと

もしかしたら、攻撃を捌く鍛錬をしていたのかも知れませんね」

だとしたら、奴は私や霞よりも上にいるのかも知れない。

S I D E O U T

ガギイイイン！！

「ぐっ！」

「華雄には逃げられてしまったが、貴様はもう逃げられんぞ！」

「はは……、いやあ、そうみたいですねぇ」

僕は今、敵の中に一人取り残されています。

回りには劉備軍や曹操軍の兵がいて、僕と関羽殿を囲む様に円を造っています。

「でも、僕もここで終わるわけにはいかないんですよねえ
主の為にも、仲間の為にも、何より自分の為に」

そう、僕は生きて戻らなければいけない。

両親にはまだ親孝行出来ていなし、ここで僕が倒れたら、あのやさしい主が自分を責めてしまうだろう。

「ならば降伏しろ！ 友軍の将を救うために犠牲になる貴方の様な

義將を、私も討ちたくはないのでな」

「降伏するのも、貴方に討たれるのも、遠慮したいですね
それだと部下に追いつけなくなりますから」

「そうか……ならば、どうすると言うのだ？」

僕の返答を聞き、僕に降伏の意思がないことを確認した関羽殿は手に持った武器に力を込める。

「なので、僕は帰らせて頂きますね」

そう言って僕は、手に持っていた剣を鞘へと戻す。

そして、関羽殿に背を向けて、？水関の方向へ向き直り、足にオー
ラをためる。

「貴様！ 今の自分の状態が分かっていないのか！？」

回りを兵に囲まれているのだぞ、この状態でどうやって退くと言う
のだ！？」

「ええ、ですから………飛び越えます！！！」

ゴウウツ！！

関羽殿に返答を返すと同時に、僕は包囲している兵の頭を飛び越え
る。

「なんだとっ！！？」

包囲を抜け出た僕は、？水関に向かって全力で走る。

しかし、その？水関にはすでに孫の旗が掲げられていた。
どうやら先ほどの会話中に？水関を取られてしまったようです。

？水関の門前には甘の旗を掲げる部隊が展開している。

さらに壁上には、弓部隊が弦を引き絞りながら、僕に照準を合わせている。

（ジャンプして越えることも出来ませんが、これでは蜂の巣ですね）

関門も壁上也通ることが出来ないので、部隊が展開していない関壁へと進路を変える。

そして、そこに道を造るために《発》の牙突・肆式を放った。

ズゴオオオン！！

全力では関が壊れそうだったので五割程度の力でやったのですが……。

それでも予想より大きめの穴が空いてしまいました。

なるべく小さい穴で目立たないようにしようと思ったのですが……。

（まあ、ゲームで許緒殿が大岩を砕いていましたし……あれ位なら大丈夫でしょう）

後は強化した足で走り、先に退いた部隊に追いつくだけだ。

第14話（後書き）

累計 213,749 PV 23,908 ユニーク

こんな妄想小説を読んで頂きありがとうございます。

総合評価 974 pt

評価してくれた方々もありがとうございます。

第15話（前書き）

とりあえず、ゲーム進めながら書いたやつを投稿。

第15話

僕たち？水関に入っていた部隊が虎牢関まで退くと、先に退いてもらった尊殿がすでに伝えてくれていたらしく、虎牢関では防衛準備が終わっていた。

ここに来るまで藍殿は、僕にどうやってあの包囲を抜けて来たかと尋ねることはありませんでした。

しかし、次に藍殿と手合わせをするときは、全力を出させてやると言われてしまいました。

そして今、虎牢関にいる三人の将と合流してこれからのことを話すことに。

「？水関が墜ちた人は残念やけど、二人が生きてて良かったわぁ」

「…………（コクッ）」

「しかし、出来ることならばもう少し数を減らしてほしかったのです」

「申し訳ないです」

「すまなかった……私が関から出てしまったばかりに……」

どうやら藍殿は、？水関でのことを反省しているようです。物語では確か、もう一度関から出撃してしまいましたけど、この様子なら大丈夫そうですね。

「それにしても……ものすっごい数やなあ？」

「そうですね、？水関でも見ましたが……何度見ても迫力が在りますね」

虎牢関の上から連合軍を見渡して呟く霞殿に、僕は思わず返事を返す。

そうして連合の方へ目を向けると、軍が動き出した。どうやら陣形を展開を開始したようだ。

「んー。陣形の展開もなかなかやな
この手の定石は籠城やし、むこうもそのつもりやろうけど……あんまり、時間を掛けるワケにもいかんしなあ」

たしかに、ここから見える連合軍は見事な動きで隊列を造り、軍を展開している。

此方はすでに展開が終わっているので、その様子を眺めることぐらいしか出来ない。

そして、ついに展開も終わったのか銅鑼が鳴らされ、虎牢関へと攻め寄ってきた。

戦闘が始まり、虎牢関に寄せてくる大軍の連合軍兵にありったけの矢を打ち込む。
数が多いので的が大きく、打ち込まれた矢はすべて連合の兵士に命中している。

しかし、その殆どは楯や鎧で弾かれるため、思ったより兵を減らす

ことができない。

「さすがに黄巾賊みたいに、簡単に矢にアタってはくれへんかあ」

「そうですね、それに士気も落ちていないようです

これだけの矢を頭上から降らされても、進軍速度が変わっていません」

とくにあの蒼い鎧の軍は、隣に列ぶ金色の軍よりも洗練された動きをしている。

おそらくあれが曹操軍なのでしょう。

（そう言えばこの間、天の御遣いは陳留の太守が保護したと詠殿が言っていましたっけ……ということは、この世界は魏ルートなのでしょうね

……出来れば、彼には消えないでこの世界に残って居てほしいです

あのエンディングは消えてしまう彼の為にも、残される彼女たちの為にも、回避させねばなりません！

でも、そのためにはこの戦で董卓軍を勝たせて魏ルートから外すか僕が呉か蜀へ行って、赤壁で魏を破らないといけないんですよねえ……はあ

まあ、この姿なら大丈夫でしょうし、後で両親には長期間家に戻れないことを伝えなくてははいけませんね

あれ？　そう言えば外の世界から来た一刀殿は歴史を変えたために、世界から圧力を受けて最後には消えてしまいましたけど……僕は大丈夫でしょうか？

僕は一刀君と違って、体はこの世界のモノですが魂はおそらく外の世界のモノでしょう

だとするともしかして………)

そんな事を考えていると突然、兵が壁上へと駆け上がった。

「ご報告です！ 賈馱さまよりの連絡で、非常事態あり！
虎牢関を放棄し、至急戻られたしとのこと！」

「虎牢関を破棄！？」

「なんやて……！？ 誤報とちゃうやろな！！」

確かに、いきなり虎牢関を放棄しろだなんて敵からの偽報か誤報だ
と思うでしょう。

「賈馱さまから、命令書も預かっていますので詳しいことは此方を」

「確かに……月の印や……、十常侍のヒヒジイどもめ……
やっぱり都に誰も残しとらんかったのは失敗やったか
詠のアホ、ぜんぜん大丈夫やないやないか……！」

霞殿の横から書を覗き込み、内容を見る。

どうやら、十常侍によって月様がピンチの様です。

「おい！ 霞、信！ 先ほどの知らせを聞いたか！？」

藍殿がそう言いながら、急いで近づいてくる。

「さっき聞いたばかりやで、藍」

「どうやら、月様が危ないようですね」

「ならば、今すぐ戻るのか？」

「しかしそれですと、連合が追撃して来ますぞ！」

「でも、月たち……危ない……」

恋殿とねね殿も知らせを聞いて此処に集まってきた様です。
これで虎牢関に居る将の全員がそろいました。

「むう、せやなあ」

「ならば虎牢関を退く時に、罨が在ると思わせてあえて門を開いて行くのはどうでしょう？」

三国志演義で諸葛亮が魏の大軍に攻められた際に使った空城計。
少しの間の時間稼ぎ程度にはなるでしょう。

「たしかに……それなら、敵は罨を警戒して時間を稼ぐ事が出来るかも知れませんが！」

「なら撤退の準備が調ったならその案を使うで？」

「しかし、その前に敵を門から話す必要がありますね……」

そう、門を開くには敵が関から離れていないといけない。
しかし今は、攻めかかる連合の兵が門に張り付いている。

「恋……が出る……」

「すまんなあ、恋」

敵を門から少し遠ざけてくれればええからな？」

「なら、他の方々は先に洛陽へ向かってください
僕は恋殿をサポート……援護して退きますので」

また、危うくこの時代に無い言葉を使ってしまうところでした。
気付かれる前に訂正出来て良かったですね。

「お前たち二人が残るのなら、安心して退くことが出来るな
私が言えたことでは無いが、無理はするなよ？」

「信殿！ 恋殿を頼みましたぞ！」

「恋！ 信！ 都で月を助けて待ってるで！」

その後、霞殿、ねね殿、藍殿の三人は自分の部隊を纏めて、洛陽へと退いた。

現在虎牢関には恋殿と僕、後は羊枯隊の副長二人と数名の隊員、そして呂布隊の少数を含めた五百人程度が残った。

現在の配置は門に五十人を配置し、残りは壁上で連合に向けて弓を放っている。

そして、僕と恋殿は壁上から攻め寄せる敵を見ながら、門から出るタイミングを計っている。

「尊殿、玲殿、二人とも僕と一緒に残る必要は無かったんですよ？
別に僕が残って居るからって、残らなくてはいけないワケでは在りませんし」

そう言って、残る必要の無かった羊枯隊の副長二人に話しかける。

「いえ、私達は羊枯隊の副長です
副長は、隊長のそばに居るものですよ」

「それに、俺たちが居た方が信も戦闘に集中出来るだろ？」

そう微笑みながら、僕に言葉を返す二人はとても頼もしかったです。

「そうですね、では僕たちが戦闘中の士気は任せましたよ」

それに、実際に下で戦うのは僕と恋殿だけですからね。

他の兵の方々には関の上から弓で援護をして頂だけでしたし。

「了解です！ お二人が全力でお力を奮うことが出来るように援護
いたします」

「それに、敵を門から遠ざけるだけでいいんだしな
別にこの敵全部を相手にする必要はねえんだから」

そうですね。

確かにこの敵をすべて倒さなくもいいですし……。
でも、恋殿なら出来そうで怖いです。

ん？ あれ？ まさか、このシュチュエーションは……。

あの紅い外套の弓兵の台詞を言うチャンス！？

よし、今度こそは尊殿には邪魔はさせませんよ？

「尊殿、一つ確認してもいいですか？」

「ん？ なんだ？」

「時間を稼ぐのは構いませんが……
別に……すべて倒してしまってもかm「信……行く……」ん……
…の……だ……r……」

まさか、今度は恋殿にやられるとは……。
あまりのショックに泣きそうになりましたよ……。

「大丈夫か、信？ 涙が出てるぞ？」

「いえ、これは「信……急ぐ……」ちょ！ 恋殿！ 包帯引っ張らないでくださいよ！
取れちゃいます、包帯が取れちゃいますよ！！」

そうして僕は、恋殿と一緒に門の前へと飛び出した。
文字通り、壁の上から。

第15話（後書き）

董卓軍を勝たせた後の妄想、頑張ります。

あと就活が忙しくなってきたのでさらに更新送れます。
なるべく放置にならないように努力したいです。

11月20日に編集しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270o/>

真・恋姫†無双 ～転生×羊×念?～

2010年11月21日07時51分発行